

臨床心理学研究

東京国際大学大学院臨床心理学研究科

第18号

論文

- メンタライゼーションの観点から見た初期の治療同盟 …… 東 啓悟 …… 1
- 箱庭におけるイメージ体験について …… 池田有加里 …… 11
——投影の仕方及び投影内容のタイプの安定性と 田中 信市
変容性を探る——
- フィルターを使用することと不安の高さの関連について …… 岡田 恵奈 …… 31

報告

- 東京国際大学大学院臨床心理センター活動報告 (2018年度) …… 55
-

2 0 2 0

臨床心理学研究

東京国際大学大学院臨床心理学研究科

第 1 8 号

メンタライゼーションの観点から見た 初期の治療同盟

東 啓 悟

目 次

1. はじめに
2. 治療同盟の定義
3. 治療同盟の歴史
4. 治療同盟を作ることが難しい患者たち
5. 治療同盟を作るとい治療
6. メンタライゼーションの観点から見た治療同盟
7. 治療同盟を構築する方法としてのMBT
8. おわりに

1. はじめに

メンタライゼーションに基づいた臨床実践、メンタライゼーション臨床は日本でも徐々にその認知度を上げ始めている。2019年3月にはメンタライゼーションに基づく治療(Mentalization-Based Treatment, MBT)の創始者たるBatemanとFonagyを招いてのMBT基礎トレーニングコースがアジアで初めて日本において開催され、多くの臨床家が参加した。ここに参加した臨床家以外にも、メンタライゼーションの考え方を自らの臨床実践に取り組みとうという試みが各地でなされ始めている。

メンタライゼーションの考え方が広まっている一方で、それが本来は精神分析から着想を得たものであるという認識は相対的に薄まっているように筆者には感じられる。実際この考え方

には精神分析的臨床の枠を超え、その知恵をより広い社会的文脈へと拡大、応用させていこうという意図が含まれている。Bateman and Fonagy (2016)によるMBTの実践ガイドにおいて、「転移」という言葉が「関係」というより一般的な用語に置き換えられている点などもその証左であると言えるだろう。

精神分析に基づく考えであると知らずともその恩恵を利用することが出来るという意味では、メンタライゼーション臨床という実践体系が目指すその方向性は大きい利益をもたらすことだろう。一方でメンタライゼーション臨床の実践知が精神分析的臨床にフィードバックされることは、精神分析的臨床にもまた有益な知見をもたらすのではないだろうか。そういった意味で精神分析的臨床の概念をメンタライゼーションの観点から検討することには大きな意味があると筆者は考える。本論はそういった試みの端緒として書かれたものである。

本論ではそうした意図のもと、精神分析的臨床の中から「治療同盟Therapeutic alliance」について取り上げた。治療同盟は幅広く展開されるようになったメンタライゼーション臨床の中でも一貫してその根幹を担い続けている重要な概念である(東, 2016)。精神分析的臨床の中から生まれた治療同盟という概念は、メンタライゼーション臨床にもその重要性をそのまま引き継いでいると言えるだろう。そうした治療同盟について改めてメンタライゼーションの観点から検討することは意義のあることであると筆

*臨床心理学研究科 博士課程(後期)

者は考える。

2. 治療同盟の定義

まず始めに治療同盟の定義についてである。『精神分析事典』（小此木ら，2002）で「治療同盟」の項を執筆した牛島（2002）は、治療同盟について「分析家とともにもっていて、しかも患者に分析場面で有意義に機能することを可能にするような非神経症的、合理的、意味のあるラポール」というGreensonの定義を引用している。同様の定義はGabbard（1994）も引用しており、この概念を考える際にGreensonの影響が大きいことが伺い知れるが、彼については後に触れることにする。またMcWilliams（1994）は治療同盟について、「治療同盟という概念は、セラピストとクライアントとの間の作業の協力的次元を指し、治療の経過の中で強烈でしばしば嫌悪的な感情が表面化しても存続する協力関係の水準」としている。

なお用語の問題であるが、「治療同盟」という用語と同じような意味で使われる言葉に「作業同盟Working alliance」というものがある。先に挙げたGreenson（1965）は治療状況の中で目的的に作業する患者の能力を強調するために「作業同盟」という名称を使用しているが、一方で「治療同盟」という用語もまた「類似した概念に言及している」としている。『精神分析事典』（小此木ら，2002）やGabbard（1994）も特に「治療同盟」と「作業同盟」という用語の使い方を区別してはいない。以上のことから、本論においてもこの両者は同じ概念を指す用語であると考え、本論ではより一般的に用いられていると思われる「治療同盟」という用語を用いることとしたい。

3. 治療同盟の歴史

「治療同盟」という用語を最初に導入したのは、恐らくZetzel（1956）であろう。しかし彼女がその用語で提唱する以前から、この概念に

ついては既に精神分析の歴史の中で言及されてきていた。そして精神分析における概念のあらゆるものの起源は精神分析の創始者たるFreud, Sに既に見ることができるが、その例に漏れず、治療同盟についても彼の仕事の中にその起源を見ることが出来る。

Freud, Sは元々、今日私たちが「治療同盟」と呼ぶものを転移の一部として考えていた。Freud, S（1912）は『転移の力動』の中で、転移を陽性転移と陰性転移の2つに分け、陽性転移をさらに「友好的もしくは情愛に満ちていて意識にのぼりうる感情の転移」と「そうした感情の無意識へと延長したものの転移」とに分類している。Sandlerら（1992）はこの内の前者をFreud, Sにおける治療同盟への言及として扱っている。

さらにFreud, S（1913）は「私たちはいつ患者に何かを伝えることを始めるべきなのか、患者に湧き起こってきた考えの隠れた意味を彼に明らかにし、分析の基礎的前提や技法の手續きへと彼を導き入れるのはいつなのか」と自問し、「十分に効果的な転移が患者のなかに確立する、つまり、患者とのあいだに適切な調和的關係＜rapport＞が築かれるまでは待たねばならない、と。患者に治療、および医師という人物に愛着をもたせることは、やはり治療の最初の目標なのである」と自答している。彼のこの考えは後に娘のFreud, Aが児童分析における導入期の必要性の中へと引き継ぎ、そのことがKleinとの大論争における争点の1つとなっている。

またFreud, Sにおける治療同盟との関連でしばしば言及されるのが「ねずみ男」（Freud, S, 1909）こと、エルンスト・ランツァーの症例である。Gabbard（1994）はフロイトとねずみ男との治療関係を「温かく誠実な関係」と評している。Quinodoz（2004）は、フロイトがねずみ男に対して、彼にとって理解できるようにその症状の意味を発見し葛藤の意味も踏まえて再構築して共有することで、ねずみ男との間に治療同盟を築いたと解説している。

いずれにしろ Freud, Sにとって、「治療同盟」と今日我々が呼ぶものは転移関係の一部として考えられていたものであった。しかし現代において治療同盟について考えるとき、この Freud, Sの考え方は必ずしも一般的ではないかもしれない。Gabbard (1994) は「患者と治療者との関係は、転移関係と現実の関係の混合したものである」と言い、この内の「現実の関係」を「治療同盟」と呼んでいる。Sandlerら (1992) も同様で、「治療同盟」を「本来の転移」とは区別している。また Greenson (1965) は「分析家に対する患者の反応」を「転移神経症」と「作業同盟」の2つに分類している。つまり現代においては、分析における転移関係と治療同盟とを分けて考えることが一般的であるようだ。両者を分けて考えるこの考え方は、先の McWilliams (1994) による治療同盟の定義にも反映されていると言える。治療同盟とは、牛島 (2002) が定義するように「非神経症的」な部分であり、Freud, S (1912) が言うように「意識にのぼりうる感情」だとされている。こうして本来的に無意識的な領域にある転移とは別の要素としてこの概念を考え、「治療同盟」という言葉を用いてこの両者を区別することの重要性を最初に主張したのが、Zetzel (1956) であった。治療同盟が重要なものであり、そしてそれを転移とは区別して考えるべきものとして認識されるようになったのは、Zetzel (1956) の貢献以降であるとされている (Sandlerら, 1992)。

そして治療同盟に関する考えとその重要性を決定的なものとし、この概念の議論に大きな影響を与えたのが Greenson (1965) の仕事である。彼は「作業同盟が、精神分析療法にとって転移神経症と同じくらい必要不可欠である、というのが本論文の主張である。精神分析療法の成功のためには、患者は本格的な転移神経症を展開し、信頼できる作業同盟を確立、維持できなければならない」(Greenson, 1965) として、その重要性を強調した。また Greenson (1965) は「作業同盟を生み出すのは患者が分析家に対して抱く感情のうち、この道理をわきまえた目

的のある部分である」とし、この部分を「観察し、分析する自我」と関連付ける。そしてこの「観察し、分析する自我」すなわち観察自我を転移関係から分裂・排除することが必要で、それができない患者は治療同盟の形成が難しい、としている (Greenson, 1965)。Gabbard (1994) 流に言えば、「転移関係と現実の関係の混合」としての患者-治療者関係において、この両者を併存させつつ区別しておくことが必要、ということになるだろう。一方で Brenner (1979) のように、この両者は区別できるものではないと考える考え方があることも付記しておく。

とはいえ、Greenson (1965) のこうした仕事の影響もあり、それ以降治療同盟は主に自我心理学派の臨床家によって重要なものとして論じられてきた。Gabbard (1994) は治療同盟に関する実証研究をレビューし、「これらの研究はまた精神療法の開始時期での治療同盟の性質が、おそらく治療の結果のもっともよい予測因子であることを示唆している」と述べ、さらに「すべての精神療法において治療同盟の確立と維持に、治療者は初めから関心を向けなければならないということである」とも述べている。同様に妙木 (2010) も、それが「どんな患者にも応用できるもの」であるとし、治療同盟を作る作業を意識化しておくことの意義について言及している。

4. 治療同盟を作ることが難しい患者たち

治療同盟の構築が精神分析的臨床にとって重要な要素であることが議論されるのと同時に、治療同盟を構築することが難しい患者たちにとっても言及がなされてきている。というよりも、治療同盟についての議論はこうして治療同盟を構築することが難しい患者に精神分析的臨床を提供できるのか、といういわゆる「分析可能性」についての議論と共に進んできたという背景がある。

治療同盟を構築することが難しい患者とはどのような患者だろうか。例えば先に示した通

り、Greenson (1965) は「観察し、分析する自我」を転移関係から分裂・排除しておくことの難しい患者については治療同盟の形成が難しいことに言及し、また「作業同盟が生じるためには、患者は対象関係を築く能力を有していなければならない」とも述べている。また McWilliams (1994) も「性格が基本的に神経症的である人々との心理療法では、「作業同盟」がすぐにでき上がって当然とすることはできない。かわりに、作業同盟が発展していくような状況をまずつくらなければならないだろう」とし、治療同盟の有無によって心理療法の進み方が全く異なることを示唆している。

McWilliams (1994) が「性格が基本的に神経症的である人々」としているように、治療同盟を構築することが難しい患者として言及されているのは、いわゆるパーソナリティ障害を有する患者たちであると言えるだろう。ではこうしたパーソナリティ障害の患者たちの場合では、なぜ治療同盟を作ることが難しいのだろうか。このことについて考えるためには、治療同盟を構築する上で患者に求められる能力、特性について考える必要があるだろう。先にも示した通り、Greenson (1965) は「観察し、分析する自我」を転移関係から分裂・排除しておける患者の能力について言及している。

また Greenson (1965) は「対象関係を築く能力」についても言及しているが、このことに関連して Sandler ら (1992) は、治療同盟が Ericson (1950) の言う「基本的信頼感」にも依拠しているに違いないと述べている。逆に言えば、何らかの理由、恐らくそこには虐待や深刻な剥奪体験などのいわゆる「外傷的育ち」(崔, 2016) に起因するものも多く含まれると思われるが、それにより基本的信頼感が乏しい患者との間では治療同盟を構築することが難しいということを示している。Sandler ら (1992) はこの他に、治療同盟を構築する上で必要な患者の能力、諸特性について、ある程度の欲求不満に耐える能力や治療目標との同一化などの条件を挙げている。

5. 治療同盟を作るという治療

次に問題となるのは、治療同盟が治療の成否を左右するほど重要な要素とされている中で、しかしその治療同盟を構築することが難しい患者との臨床はどのように実践していけばよいのか、という点である。狩野(2002)は境界性パーソナリティ障害の治療について「治療同盟をつくり上げていくことが治療の本質的な作業であると同時に治療の目標だといえる」と述べており、Gabbard (1994) もまた同様の指摘を行っている。つまり、先の McWilliams (1994) による心理療法の進み方に関する言及にもあるように、治療同盟の構築が難しい患者の場合には、治療同盟を作り上げていくこと自体が第一の治療目標になると考えられるだろう。

しかしこうして治療同盟を構築することが難しい患者に対してはまずは治療同盟を構築すること自体を治療の目標とすることは様々なところで議論されているが、実際にそれをしていくための技法などについての言及は、治療同盟がこれだけ議論されている割にあまり多くはない。そこで筆者は、治療同盟を構築する方法論として MBT、メンタライゼーション臨床からの見解、技法について検討してみたいと思う。というのは、メンタライゼーションという概念と MBT、そしてその原点としてのメンタライゼーションという観点を加味した精神分析的な心理療法は、元々は Gabbard (1994) や Ericson (1950) が治療同盟を構築することが難しいと評した境界性パーソナリティ障害を有する患者との臨床実践の中から発展していったものであり、そこから得られる知見はパーソナリティ障害を有する患者との間に治療同盟を構築する方法論を検討する上で有用であると考えられるからである。

6. メンタライゼーションの観点から 見た治療同盟

筆者は以前別のところで、様々に応用されるようになったメンタライゼーション臨床に通底する根幹の1つとして、メンタライゼーション臨床では治療同盟が重視されることを挙げた(東, 2016)。それは、養育者との安定した愛着関係の中で育まれるメンタライジング能力は、治療者との安定した愛着関係の中でこそ回復するというメンタライゼーション臨床の治療原理に基づいている。従ってメンタライゼーション臨床では、メンタライジング能力が回復する土台としての患者との愛着関係および治療同盟を構築することをその治療の第一歩と考えており、その方法論が明確化されている。

このことを考えるとき、そもそもパーソナリティ障害を有する患者の場合で治療同盟を構築することが難しいのは、Sandlerら(1992)が提示した治療同盟を構築する能力を患者が十全には有していないからということを考える必要がある。つまり、観察自我、基本的信頼感、欲求不満耐性などである。少々大雑把な定義とはなるが、メンタライジング能力とは心という観点から自分や他者の行動を柔軟に解釈する能力を指すものであるから、観察自我とは近い関係にあり、また自分の行動の背景にある心を想定できることで衝動的にならずに済むという意味でもあるから、欲求不満耐性とも関連する能力である。境界性パーソナリティ障害において示される様々な問題は、このメンタライジング能力が十分でないことによって生じているというのがメンタライゼーションの観点からの理解であり、この観点からすると、メンタライジング能力が十分でないことが治療同盟の構築の障害ともなっているということが考えられるだろう。

さらに基本的信頼感が乏しいという問題である。メンタライゼーションの観点から考えた時、これは「認識論的信頼Epistemic trust」が確立される代わりに、「認識論的不信Epistemic

mistrust」が前面に出ているという状態と考えることが出来る。「認識論的信頼」とは、「他者からもたらされる社会的世界についての情報に対して私たちが持つ信頼」のことであるとされる(Bateman and Fonagy, 2016)。つまり、自分にもたらされる自分や他者、社会についての知識やその源泉たる養育者に対して、それは信頼に足るものであるという感覚のことである。養育者との間に安心な愛着を持った子どもは養育者との間でこの認識論的信頼を十分に醸成することができ、乳児は養育者を信頼できる情報源として認識して、養育者の様々な特性を取り入れていくようになるのである(Bateman and Fonagy, 2016)。また同時にこの養育者との認識論的信頼は、それをベースとして広く他者へと般化されていくものでもある。つまり、養育者との認識論的信頼をベースにして、他者もまた信頼に足る社会的情報の源であろうと認識論的信頼が般化した状態が、基本的信頼感が確立されている状態であると考えられるだろう。

この認識論的信頼とは反対に、安心な愛着を持たずに養育者を信頼に足る情報源と認識できない状態が「認識論的不信」の状態である(Bateman and Fonagy, 2016)。Bateman and Fonagy (2016)は、認識論的不信の状態にある人は「話し手の動機を悪意あるものとして想像する。そのような人は新しい情報に抵抗するようになり、頑なで、強情で、残忍にすらなるかもしれない。何故なら彼らは話し手からの新しい情報を深刻な疑念を持って扱い、それを内在化することはないからである(すなわち彼らはそれに合わせて自分の内的精神構造を修正するということはしないだろう)」と述べている。それ故に、外傷的育ち(崔, 2016)などにより認識論的不信が前面に出ている境界性パーソナリティ障害の人は、他者からもたらされる情報や特性を信頼することもないし、またその情報や特性を取り入れ、内在化することもない。これにより彼らに変化する可能性は閉ざされてしまうことになる。そしてこの認識論的不信の感

覚もまた般化されるものである。外傷的育ちとは、崔（2016）によれば、虐待やネグレクト、過度な支配や制限、自主性の剥奪など、心に傷を負うような養育体験のことを指し、メンタライジング能力が十分に育たない養育体験のことを指す。こうした過酷な養育体験に日常的に晒されてきた人にとって、人とは基本的に信頼に値しないものである、という感覚が支配的になっていることだろうことは十分に想像できることだろう。そしてこれが基本的信頼感が乏しいとされる状態であると考えられる。

こうした点から考えると、メンタライゼーションの観点から見た治療同盟とは、患者が治療者に安定した愛着関係を持ち、それを基に治療者に対して認識論的信頼を抱いている状態であると考えることが出来るだろう。この認識論的信頼があって初めて患者は治療者のメンタライジング能力という特性を己のものとして内在化し始めることが出来るのである。またこの認識論的信頼や認識論的不信の状態が精神分析の文脈においてどのような影響をもたらすかを考えると、それは治療者からもたらされる情報、すなわち解釈が患者にとって利用可能なものと思えるかどうか、ということに関わってくると言えるのではないだろうか。思い出されるのはFreud, S (1913) の「私たちはいつ患者に何かを伝えることを始めるべきなのか、患者に湧き起こってきた考えの隠れた意味を彼に明らかにし、分析の基礎的前提や技法の手続きへと彼を導き入れるのはいつなのか」「十分に効果的な転移が患者のなかに確立する、つまり、患者とのあいだに適切な調和的關係＜rapport＞が築かれるまでは待たねばならない、と。患者に治療、および医師という人物に愛着をもたせることは、やはり治療の最初の目標なのである」という自問自答である。認識論的信頼があって初めて患者は治療者からの介入を受け入れられるという示唆は、既にFreud, Sの発想に見出されていたのかもしれない。

ちなみにメンタライゼーション理論は、精神分析の文脈から考えると英国自我心理学派の発

展（池田，2013）であると考えられる。そして筆者は以前に、心的表象論（Sandler and Rosenblatt, 1962）の観点から考えたとき、表象を形成する能力としてのメンタライジング能力の発達、心的過程が制止した状態（Fonagyら，1993）からの回復を図るMBTは精神分析の実践であると言えるかと結論付けている（東，2018）。ではこの認識論的信頼や認識論的不信の状態を心的表象論の観点から説明するとどうなるだろうか。

狩野（1995）によれば、心的表象とは「記憶痕跡を心的に組織化したもの」で「体験のプロトタイプ」である。この点から考えれば、認識論的信頼が十分な状態、基本的信頼感の獲得できている状態というのは、養育者との安心な愛着関係の中で築かれた良い対人関係の表象が対人関係体験のプロトタイプとなっている状態と言えるだろう。反対に養育者との安心でない愛着関係、怯え脅かされるような養育関係の中での対人関係の表象が対人関係体験のプロトタイプとなってしまっている状態は認識論的不信の状態だと考えられるだろう。このように考えると、Freud, S (1912) が「友好的もしくは情愛に満ちていて意識にのぼりうる感情の転移」と呼んだ方の陽性転移とは、この対人関係全般に般化し得るプロトタイプとしての表象、認識論的信頼が優勢な表象が投影されていると考えることが出来るかもしれない。そしてその逆、認識論的不信が優勢な表象が投影されているであろう場合ももちろんあり得る。このように考えると、その歴史に反して、治療同盟を再び転移の文脈へと立ち戻って語る事が出来るかもしれない。

7. 治療同盟を構築する方法としてのMBT

そしてBateman and Fonagy (2016) は、この認識論的信頼の議論と照らし合わせつつ、MBTの治療初期で最も重要なものとして患者の認識論的信頼を増進させることを挙げており、これを「他のどんな名前でも呼ばれようと治

療同盟」であるとしている。さらにそのための方法として、MBT初期の取り組みの例を7つ要約した。その7つとは、①アセスメント過程の早期に共同でフォーミュレーションを作り上げること、②患者自身の例を用いてメンタライゼーションの脆弱性を見極めること、③患者の症状と成育史の観点から診断について話し合うこと、④愛着パターンとそれが現在の関係性の中でどのように再現されているか描き出すこと、⑤患者は導入段階に取り組むこと、⑥問題に対する発達の物語を確立すること、⑦治療が患者にとって大事なことに関連するものとなるように、患者に関係する目標を共同で取り決めること、以上の7つである (Bateman and Fonagy, 2016)。MBTでは治療の初期段階でこの7つに取り組むことで、患者は治療者が伝えていることが自分に関するものであること、自分が個人として認識されていることを理解し始め、これによって患者の認識論的不信、警戒心が減少していくとされている (Bateman and Fonagy, 2016)。

筆者なりにこの7つの取り組みの勘所を挙げるとするならば、これらが患者と治療者との共同作業によって、しかも患者自身が理解できる形で作り上げられているということが重要なだろう。患者自身が自分の問題について自分で理解できるように、ということは、MBTの黎明期の頃から重視されていた点である (Bateman and Fonagy, 2006)。当時から、例えば患者にもわかるような短いアセスメント、フォーミュレーションのレポートを共同で作成するなどの取り組みはなされており、この取り組みは崔 (2016) の中でも紹介されている。

そしてこの患者自身が自身について理解できるようにという取り組みは、遡れば再びFreud, S (1912) に、ねずみ男との症例にそれは見出される。Quinodoz (2004) が指摘するように、Freud, Sはねずみ男自身が自分について理解できるように症状の意味を発見し葛藤の意味も踏まえて再構築して共有することで、ねずみ男との間に治療同盟を築いたとされている。Freud,

Sのこうした取り組みがねずみ男との間で治療同盟という形で結実したのは、メンタライゼーションの観点から考えれば、ねずみ男が自分について理解できるような説明をされ、それによってFreud, Sの伝えていることが自分に関係しているものであると理解し、個人として認識されていると感じたことで、ねずみ男がFreud, Sに対して認識論的信頼を抱いたから、と考えることができるだろう。

認識論的信頼が触まれた状態、認識論的不信は自身への尊重がなく、自身が蔑ろにされてきた中で構築されてきてしまったものであると思われる。そうであるならば、その状態から認識論的信頼を再び増大させるには、何よりも患者自身を個人として尊重しなければならず、しかも尊重されているということを患者自身が認識できなければならない。その意味でこうした認識論的信頼、治療同盟を構築するための作業は患者と共有できる意識的な領域で行われる必要があると思われる。こうして治療者が患者を個人として尊重し、患者自身がそれを感じされ、そして治療者が自分と対等で協働的な関係にあると理解できる中でこそ、治療同盟は構築されて行くものと考えられるだろう。

8. おわりに

以上、筆者はメンタライゼーションの観点から見た治療同盟の性質と、それを構築するための方法論について検討してきた。臨床家の働く現場が多様化してきた現代において、治療同盟を構築することが難しい患者と接する機会は確実に増えているのではないだろうか。そもそも自ら望んで治療場面にやって来たのではない患者、クライエントと、それでも治療関係に入ることを余儀なくされる現場で働く臨床家も数多いことだろう。それでなくとも現代の臨床現場ではパーソナリティ障害を有する患者、クライエントと会う機会も多いと思われる。そうした中で、治療同盟を持って当たり前ではなく、治療同盟を構築することから関係を始めて

いくための方法論としてのMBT, メンタライゼーション臨床の観点は, 学ぶものが多いだろうと筆者は考える。

本論で取り扱ったのは, 治療関係初期の, しかも意識的な側面における治療同盟についての検討であった。一方で, Greenson (1967) が治療抵抗として利用される可能性に言及し, またSandlerら (1992) も指摘するように, 治療同盟には無意識的な側面も存在する。一見治療同盟が組めているように見えても, その実その関係が真の精神分析的作業にはなっていない, あるいはその治療関係が何らか他の目的のために使用されていたという場合も多く体験される場所である。Sandlerら (1992) はこうした治療同盟を指して「偽同盟pseudo-alliance」と呼んでいる。これらは治療関係が開始されてし

ばらく経ってから治療関係の一部として立ち現われて来るものであるとされ, そういった意味で治療同盟は静的なものでなく, 関係の進展に応じて変化していく動的なものである。このように考えると, 現在「治療同盟」という言葉と「作業同盟」という言葉は大きな区別なく使われているが, 「偽同盟」という治療同盟ではなく本当の意味で精神分析的な作業に取り組むための同盟という意味で「作業同盟」という言葉を「治療同盟」とは区別して使うということがあってもよいかもしれない。そしてこうした動的な治療同盟というものも含めて, メンタライゼーションの観点から治療同盟を捉えていくという試みも不可欠だろうと思われ, これは今後の課題である。

参考文献

- 東 啓悟 (2016): メンタライゼーションの心理学. 精神療法. 42 (3), 38-43.
- 東 啓悟 (2018): MBTは精神分析の実践と言えるのか? 臨床心理学研究——東京国際大学大学院臨床心理学研究科. 18. 63-77.
- Bateman, A. and Fonagy, P. (2006): Mentalization-Based Treatment For Borderline Personality Disorder—A Practical Guide. Oxford University Press.
- Bateman, A. and Fonagy, P. (2016): Mentalization-Based Treatment For Personality Disorder—A Practical Guide—. Oxford University Press.
- Brenner, C. (1979): Working alliance, therapeutic alliance, and transference. Journal of the American Psychoanalytic Association. 27 (supplement): 137-157.
- 崔 炯仁 (2016): メンタライゼーションでガイドする外傷の育ちの克服——<心を見わたす心>と<自我境界の感覚>をはぐくむアプローチ——. 星和書店.
- Erikson, E. H. (1950): Childhood and Society. W. W. Norton (仁科弥生訳 (1977, 1980): 幼児期と社会 1, 2. みすず書房).
- Fonagy, P., Moran, G., Edgumbe, R., Kennedy, H., Target, M. (1993a): The Roles of Mental Representations and Mental Processes in Therapeutic Action. Psychoanalytic Study of Child 48, 9-48.
- Freud, S. (1909): Notes upon a case of obsessional neurosis. In S.E.10 (藤山直樹監訳, 中西摩衣ら訳 (2017): 強迫神経症の一症例についての覚書. フロイト症例論集2. 岩崎学術出版社).
- Freud, S. (1912): The Dynamics of Transference. In S.E.12 (藤山直樹監訳, 澁木尚子訳 (2014): 転移の力動. フロイト技法論集. 岩崎学術出版社).
- Freud, S. (1913): On beginning the treatment (Further recommendations on the technique of psycho-analysis, I). In S.E.12 (藤山直樹監訳, 小澤和輝訳 (2014): 治療の開始について (精神分析技法に関するさらなる勧め I). フロイト技法論集. 岩崎学術出版社).
- Greenson, R. R. (1965): The Working Alliance and the Transference Neurosis. Psychoanalytic Quarterly. 34, 155-181.
- Gabbard, G.O. (1994): Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice: The DSM-IV Edition. American Psychiatric Press. (権 成鉉訳 (1998): 精神力動的精神医学——その臨床実践 [DSM-IV版] ——①理論編. 岩崎学術出版社).
- 池田暁史 (2013): 愛着理論とメンタライゼーション. 精神分析研究. 57 (1), 12-21.
- 狩野力八郎 (1995): 心的表象論. 狩野力八郎 (2009): 方法としての治療構造論 精神分析的心理療法

- の実践. 金剛出版.
- 狩野力八郎 (2002): 重症人格障害の臨床研究——パーソナリティの病理と治療技法. 金剛出版.
- McWilliams, N. (1994): Psychoanalytic Diagnosis: Understanding Personality Structure in the Clinical Process. Guilford Press (成田善弘監訳 / 神谷栄治, 北村婦美訳 (2005): パーソナリティ障害の診断と治療. 創元社).
- 妙木浩之 (2010): 初回面接入門 心理力動フォーミュレーション. 岩崎学術出版社.
- Quinodoz, J.M.(2004): LIRE FREUD: Decouverte chronologique de l'oeuvre de Freud. Presses Universitaires de France.(福本 修監訳(2013): フロイトを読む 年代順に紐解くフロイト著作. 岩崎学術出版社).
- Sandler, J., Rosenblatt, B. (1962): The Concept of the Representational World. Psychoanalytic Study of Child. 17, 128-145.
- Sandler, J., Dare, C., Holder, A. (1992): The patient and the analyst: The Basis of the Psychoanalytic Process (藤山直樹・北山 修監訳 (2008): 患者と分析者 精神分析の基礎知識 [第2版] : 誠信書房).
- 牛島定信 (2002): 治療同盟. 小此木啓吾編 (2002): 精神分析事典. 岩崎学術出版社.
- Zetzel, E. R. (1956): Current concepts of transference. The International Journal of Psychoanalysis. 37, 369-376.

箱庭におけるイメージ体験について

——投影の仕方及び投影内容のタイプの安定性と 変容性を探る——

池 田 有 加 里*
田 中 信 市**

目 次

- I. 問題と目的
- II. 方法
- III. 予備調査
- IV. 本調査
- V. 考察
- VI. 総合考察
- VII. 今後の課題

要 約

箱庭療法はミニチュアや砂による造形を媒介にした投影を利用した心理療法である。本研究では箱庭制作において、制作者の投影の仕方と投影内容を検討し、投影の仕方として「ひらめき型」「ミニチュア対話型」「投影不活性型」の3つの型を見出した。また、投影内容として「実人生優位タイプ」「内的イメージ優位タイプ」「説明優位タイプ」の3つのタイプを見出した。さらに、制作者の箱庭に対する投影の仕方及び内容は、継続して制作された場合、制作者内で変化するのか検討した。継続的に制作しても制作者内でほぼ一定である場合と、変動がみられる場合があり、後者に対して、変動に注目することによって、箱庭制作体験の理解が深

まることを見出した。

キーワード：箱庭体験 投影の仕方 投影内容
継続制作

I. 問題と目的

箱庭療法はミニチュアや砂による造形を媒介にした投影を利用した心理療法である。制作者の内界はミニチュアや制作した場面に投影される。投影の仕方は制作者やミニチュアによって異なり、さまざまな投影の仕方が存在する。イメージの特徴の一つとして「イメージはそれ自身の自律性を持ち、自我のコントロールを超えている」（河合，1991）ことがあげられ、箱庭を制作した時でも意識的に作ろうとしたものではないものを作り上げてしまうことや、制作中や制作後にイメージーションが自ずと広がってくることもある。この箱庭療法におけるイメージの広がり方は個人によって異なるが、イメージが制作者の中でどのように広がっていくのかということに焦点を当てた研究はあまり多くない。

木村（1985）は、ユングのタイプ論を応用したQカードで制作者のタイプ分けをし、箱庭作品との関係を検討した。外向群は使用するミニチュアが少ない傾向にあり、全般的に動的であ

* 臨床心理学研究科 博士課程（後期） ** 人間社会学部

るとし、内向群は外向群と比べて使用するミニチュアが多く静的であるとした。佐藤（2018）もユングによるタイプと箱庭作品の傾向について検討し、玩具数は木村（1985）の結果と異なり、外向得点が高いほど玩具の使用が多く、「制作者がその場でイメージを思い浮かべ玩具を棚から選び砂の上に置くという行為は、内向態度というより実際は外向的な態度が大きく関わっている」と述べた。作品から受ける印象としては木村（1985）と同じく、外向群の方が動的で見やすく、内向群は表現が静的でまとまりに欠けるという。久米（2010）はQカード分類を用いてユングのタイプ論の合理的・非合理的タイプと制作過程を比較した。その結果、制作過程において「合理的タイプ」はイメージができあがるまでの時間が早く、作品を一つのまとまりのあるものにしようとして意識的に作品をコントロールする傾向が強く、「非合理的タイプ」はイメージの自律性にある程度身を任せ、作品を完成していくと示唆した。このように、制作者のタイプによって、箱庭作品に違いが出てくる。箱庭作品を制作者のタイプ分けする先行研究ではユングのタイプ論に焦点を当てており、イメージの広がり方は多彩なため、さらに異なる視点も必要となる。

後藤（2003）はびったり感を「主体が身体感覚に導かれて、自らの存在の本質に関わる体験をすること」だと論じている。このように箱庭では意識していない部分が働くことは少なくない。伊藤（2004）の研究ではイメージと意識の関係性において、イメージに没入する制作者やイメージが動くことに抵抗のある制作者がいることを示している。以上のように制作者によって、または制作するごとに箱庭におけるイメージの体験は異なると考えられる。石原（2015）はミニチュアから受けるイメージについて制作者のこれまでの体験が浮かぶこともあると示唆した。箱庭制作では実際の生活に関連したものと内的な世界を表現するものが混ざり合って表現されることが多いが、制作者によっ

てどちらが優勢になりうるのか、箱庭を制作するタイミングで違うのかを検討することは臨床の場面でも一助になると考えられる。千葉（2018）は箱庭制作中にもさまざまなイメージ体験をしているが、言葉にすることによって箱庭制作後にもイメージ変容の体験をしていると主張している。箱庭療法においては制作後には体験について多く語らないこともあるが、箱庭体験後にも制作者の中でイメージが動き続け、変容していくことは心理療法にとって非常に意義のあることだと思われる。

本研究では箱庭制作において、制作者のイメージの広がり方と投影内容を検討する。どのようにイメージを投影し、どういった内容を投影するのかを明らかにすることは、箱庭療法を行う際に見守り手が制作者の体験を味わう一助となるだろう。また、制作者のイメージ投影の仕方は複数の制作で変化するのかを検討する。

Ⅱ. 方法

投影方法と投影内容について、どのような分類が可能かということ、予備調査1で検討する。池田（2018）の箱庭作品とインタビューを文字起こししたデータを素材として、池田と田中が話し合いを通じて、分類のひな型を作る。

それを元に、予備調査2として、石原（2015）のデータから箱庭制作過程が十分に読み取れる事例をピックアップして、予備調査1の分類を、池田と田中の話し合いを通じて、試みる。さらに、予備調査3として、小野澤（2006）の継続的に制作された箱庭に、同様な方法で分類を試みる。

本調査として、5名の研究協力者に継続的に箱庭制作をしてもらい、箱庭写真と半構造化面接によるインタビューを文字起こししたものを素材として、予備調査の分類をさらに詳細に検討していく。

Ⅲ. 予備調査

予備調査1

探索的研究として、まず、投影の仕方および投影内容に関して、どのような視点から分析するのがよいかを検討することから始めた。

出発点として、池田（2018）の8名のデータを分析し直し、共同研究者である池田と田中が話し合いを通じて、投影の仕方として、以下の3つの型を見出した。①印象の深いミニチュアの刺激などから箱庭制作の方向性を決めるような投影をしている『ひらめき型』、②ミニチュアやその配置などを通じて投影が活性化していく『ミニチュア対話型』、③制作後のインタビューでもあまり投影体験が語られない『投影不活性型』である。当初は、別の命名であったものもあるが、最終的にこの3つに集約されていった。

また、投影内容としては、以下の3つのタイプを想定した。①実人生に関連する場面を箱庭に置き、実人生についての語りが多い『実人生優位タイプ』、②活性化された内的なイメージに影響された表現が多く、内的イメージについて多く語る『内的イメージ優位タイプ』、③投影内容の語りではなく、ミニチュアや場面そのものについての説明が多い『説明優位タイプ』という視点が抽出された（表1）。

以上の分類が箱庭体験を分析していくときに、分類作業が複雑すぎず、評定者間で一定の安定性があるかどうかを検討するために、予備調査2を行った。

予備調査2

一つのミニチュアのみを研究協力者に置いてもらい、制作過程を複雑化させないことで、体験過程の正確な言語的表現を引き出そうとした石原（2015）のデータを素材として、予備調査1で見出された視点で分類できるか、そして、分類視点として一定の安定性があり、いくつかのタイプに分かれ分類の有効性があるかを確かめることにした。分類は、予備調査1と同様に、池田と田中による話し合いを通じてなされた。

まず、石原（2015）の研究であるが、ローデータが掲載されているわけではないので、検討されている10名のうち（p. 37～p. 168）、分類作業をしていくのに、十分な記述がある5名を選び、分類を試みた。なお、事例の番号は、石原の研究協力者と同じ通し番号を使用した。

石原の研究はミニチュアを一つ選んで砂箱に置いてもらい、インタビューしたデータを基に、箱庭制作過程を調査するというユニークな研究であり、本研究とは異なる研究状況だが、一つのミニチュア選択であっても、研究協力者の語りが豊かであるので、制作者の投影を分類しようとみなした。逆に、箱庭制作状況が異な

表1 予備調査1の分類

	投影の仕方	投影内容
1	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ
2	投影不活性型	実人生優位タイプ
3	投影不活性型	説明優位タイプ
4	投影不活性型	説明優位タイプ
5	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
6	ミニチュア対話型	実人生優位タイプ
7	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ
8	投影不活性型	説明優位タイプ

る研究素材で分類でき、それぞれの分類に分かれるようならば、視点としての有効性が高まると考えられる。

研究協力者1は選んだミニチュアから情景が浮かび、投影が活性化され連想が内的に広がっているため、「ひらめき型／内的イメージ優位タイプ」とした。研究協力者2はミニチュアに惹かれ、自分の人生についての連想が出てきたため、「ひらめき型／実人生優位タイプ」とした。研究協力者3は選ぶ過程の中で様々な内的な連想をし、他のミニチュアからもイメージに影響を受けたため「ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ」とした。研究協力者6はイメージが膨らんでおらず、客観的な説明をしているため、「投影不活性化型／説明優位タイプ」とした。研究協力者7については造形やミニチュアの位置から投影が見られたが、ミニチュアや情景の説明が主だったため、「ミニチュア対話型／説明優位タイプ」とした（表2）。

予備調査3

次に、小野澤（2006）のデータを使用して、予備調査2と同様に分類の安定性・有効性を確認した。小野澤のデータは、箱庭制作中のビデオデータと箱庭制作後のインタビューの音声データを文字起こししたもので、分類するにあたって、相当豊富な素材としての資料があるので選んだ。さらに、小野澤のデータは、3名の研究協力者に継続して5回の箱庭制作をしてもらっているため、投影の仕方や投影内容が時系列に変化する可能性があるかどうか検討できるのである。下記の研究協力者の表記は小野澤

の研究に準じる。

投影内容の「内的イメージ」、「実人生」、「説明」のそれぞれは、程度の差こそあれ、重複して含まれる方が一般的である。ここでは報告しないが、文字情報を細かく分類し、足しあげることによって、どの内容が優位なタイプかを決定しようと試みた。かなり煩瑣な作業であったが、実際には量的に頻度が高い語りで決定するよりも、やはり質的に箱庭全体を支配している大きな要素を重んずる方がよいのではないかという結論に達し、分類のための量的な試みはやめることにし、あくまでも箱庭制作全体を、両名で話し合うことで進めていくことにした。

両名による話し合いは資料を一緒に丁寧に読み込みながら話し合う形を取った。話し合いには長時間を費やしたが、分類が一致しない場合はほとんどなかった。そして、一致しない場合には、1週間以上の期間を空けてから再度話し合いをもった。その結果、意外なほどスムーズに分類が進み、分類はすべて一致するに至った。

研究協力者Aは、5回の制作ともに一つのミニチュアによってイメージが展開し箱庭制作の方向性が決まり、内的イメージが優位に現れていたため、いずれも「ひらめき型／内的イメージ優位タイプ」とした。

研究協力者Bについては、いずれもミニチュアを置いていくうちにイメージが活性化していったので、「ミニチュア対話型」とした。投影内容については、1回目と3回目、4回目は内的イメージが優位に投影されていたため、「内的イメージ優位タイプ」とした。2回目は内的イメージがあまり展開しておらず、箱庭の情景

表2 予備調査2の分類

	投影の仕方	投影内容
1	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ
2	ひらめき型	実人生優位タイプ
3	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
6	投影不活性化型	説明優位タイプ
7	ミニチュア対話型	説明優位タイプ

の説明が主だったため「説明優位タイプ」とした。また、5回目の制作では実人生についての投影がかなり見られたため、「実人生優位タイプ」とした。

研究協力者Cについては、1～4回目まではミニチュアとのかかわりの中で内的なイメージが展開していたため、「ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ」とし、5回目のみ、制作の始めに箱庭の方向性が決まるイメージが出現したために「ひらめき型／内的イメージ優位タイプ」とした（表3）。

小野澤の研究協力者においては、投影の仕方は、わりあいと個人の中で一定する傾向にあることがわかった。Cのみが5回目の制作で、それまでのミニチュア対話型からひらめき型に変化している。一方、投影内容については、Bが時系列の中でいくらかの揺れを体験しているこ

とがわかる。本調査では、継続的制作時における個人内での変化に注目していくことにした。

全体としては、3つの投影の仕方と3つの投影内容に分類することは、箱庭制作体験の言語資料に基づいて可能であり、評定者間で丁寧話し合っていくと完全に一致したので、この分類を使用して、本調査に臨むことにした。

Ⅳ. 本調査

目的

ここまでの予備調査で、投影の仕方と投影内容をそれぞれ3つに分けて分析していくことに、評定者間で一定の安定性が確認されたので、さらに新たなデータで再度この分類が箱庭分析の視点として使用可能で、一定の有効性があるかどうか検証する。とくに、継続的に制作

表3 予備調査3の分類

	投影の仕方	投影内容
A-1	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ
A-2	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ
A-3	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ
A-4	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ
A-5	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ
B-1	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
B-2	ミニチュア対話型	説明優位タイプ
B-3	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
B-4	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
B-5	ミニチュア対話型	実人生優位タイプ
C-1	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
C-2	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
C-3	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
C-4	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
C-5	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ

された箱庭体験において、投影の仕方や投影内容に変化が生じるかどうか注目し、変化した場合には、その意味を捉えていきたい。

方法

箱庭を制作し、その体験をある程度言語化できる5名(20代女性3名, 20代男性1名, 30代女性1名)を対象とした。

複数のタイプの継続的箱庭制作の様子を把握するために、池田(2018)の研究協力者に打診をし、「ひらめき型/内的イメージ優位タイプ」の人と、「投影不活性型/実人生優位タイプ」の2名から参加協力を取り付けることができたので、今回は1回のみ制作だったが、4回の継続制作でどのような変化がみられるかを捉えようとした。なお、前回制作から3年程度が経過している。その他の3名は新たに参加してもらった人たちである。5名の内訳であるが、2名が心理臨床の仕事をしていて、1名は一般職の仕事をし、2名は心理系の大学院生である。

制作はおよそ月に1回、計4回行い、箱庭制作後に半構造化面接を行った。半構造化面接での主な質問項目は以下の通りである。

- ①箱庭を作って思い浮かぶことをお聞かせください。
- ②制作中はどのようなことを思いましたか。
- ③各ミニチュアについての質問(このミニチュアについてお聞かせください)。
- ④特に気持ちが動くものや惹かれるミニチュアはありますか。
- ⑤今、箱庭を見ていて思い浮かぶことはありますか。

箱庭の写真と半構造化面接インタビューデータを文字起こしたものを素材として、池田と田中が上述した予備調査と同様に、ひとつひとつの箱庭について丁寧に話し合い、投影の仕方と投影内容を分類していった。話し合いで一致しない場合は、予備調査同様、1週間以上の期間を置き、再び話し合った。今回も、2回目の

話し合いではスムーズに分類が進んだ。

投影の仕方として、①ひらめき型(印象深いミニチュアの刺激から箱庭制作の方向性を決めるような投影をしている)、②ミニチュア対話型(ミニチュアやその配置を通じて投影が活性化していく)、③投影不活性型(制作後のインタビューでもあまり投影体験が語られない)という視点と、投影内容として①実人生優位タイプ(実人生についての語りが多く、実人生に関連する場面が多い)、②内的イメージ優位タイプ(活性化された内的なイメージに影響された表現が多く、内的イメージについて多く語る)、③説明優位タイプ(投影内容の語りではなく、ミニチュアや場面そのものについての説明が多い)という視点から、分析を行った。

結果

各研究協力者の投影の仕方と投影の内容を見ていく。以下、「」表記は研究協力者の語りである。

研究協力者 A

1回目の制作では、砂を移動してできた山のイメージはAにとって住んでいる地域に近い山のイメージでちょっと地味で「寂しいけど、ずっとそこにある感じ」だった。「田舎」のイメージに沿って和風の家や馬、畑などを置いていき、丸太を置く時に「妹が川に落ちた」という小さい頃の思い出が浮かび懐かしさを感じた。制作し終わった頃には「自分の子ども時代に見たものだったりとか、あとは田舎のおばあちゃんとか北海道のおばあちゃんちのイメージが強くて」と、置いた風景に両親の祖母の家のイメージが強く影響していることに気がついた。前述した丸太と山の他にも馬や熊といったミニチュアにも祖母のイメージが投影されていた。全体的に実人生が投影されているわけではないが、ミニチュアや風景にさまざまな実人生のイメージが投影されていることから<ミニチュア対話型/実人生優位タイプ>とした(写真1)。

2回目は最初に手に取った花と木のミニチュアから「生け花みたいにしたかったら、そしたら花瓶が必要だな」と感じ、砂を花瓶に見立てる造形を行い、この生け花や花瓶のイメージが箱庭の方向性を決め、イメージが一気に展開していった。このことから「ひらめき

型」とした。投影内容としては、成長して花を咲かせるために原石から加工して花瓶の蓄えを作るというような内的イメージが活性化している語りが多かったので、〈内的イメージ優位タイプ〉とした(写真2)。

3回目では、水をメインに作っていかうとす



写真1 Aの1回目の箱庭



写真2 Aの2回目の箱庭

るが、砂が多くイメージ通りにならなかった。水を広げようと「もうちょっと強い水の感じが欲しいなと思って」ビー玉を使うという工夫をするが、「水メインにするのが難しいな—って。じゃあどうしよう」と戸惑い、イメージが止まってしまった。作ろうとしたイメージがうまく表現できず、半構造化面接でもミニチュアへの投影がほとんど語られず、ミニチュアの説明が多かったため、〈投影不活性型／説明タイプ〉とした(写真3)。

4回目の制作では、木を手にしてから、宮崎駿の「風の谷のナウシカ」の主人公が地下で腐海の植物を栽培しているシーンが湧いてきた。作っていくうちにその場面が「居心地が良さそう」と感じて制作していく。置いたトンネルはこの世界への入り口として置き、生き物は他の人が入ってほしくないので見張り役をしている。制作後に振り返ると箱庭の場面では「人しか来られない」場所で、「私の部屋のイメージ」であり、現実世界でよくないことが起きた時に入れることのできる場所のイメージだった。木から腐海のイメージが浮かんできて、暗い森のイメージから居心地の良い場所へと展開していった。〈ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ〉とした(写真4)。

研究協力者B

1回目の制作は、「なんか箱庭の真っ白なところを見ると、掘り所が欲しくなるというか、なんか不安になる感じがある」と掘り所となる家をどこに置くのか考えながら、街並みや「牧場みたいな動物が放し飼いされているような場所」を作る。登場人物である自分はミニチュアとしては置いていないが「私がいるところはしつて言えば車でこちらに渡ろうとしているところ」と語っていた。拠点となる家のイメージから街並みは実人生との関連はかなりありそうであるが、だからと言って、現実の家や街並みが投影されているというよりは、内的な世界についての語りと捉えることができ、町の世界と対比するような動物の世界は明らかに内的イメージの世界であるので、〈ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ〉とした。

2回目では、孔雀から「向こう側にあるもの」という連想が膨らんでいき、亡くなった親戚についての連想へとつながっていく。向こうに行くのは怖い、行く必要があるというような二律背反的な心の動きの語りを引き出す重要なミニチュアとなる。現実亡くなった方に対する思いが浮かび、もっと会っておけばよかったという後悔がある一方で、幸せに亡くなられたん



写真3 Aの3回目の箱庭



写真4 Aの4回目の箱庭

だからという心の揺れを制作後のインタビューで語っている。さらにお墓のそばに咲く桜の花からは祖母の死が思い出されている。制作者にとって重要な現実の人たちの死が大きなテーマであったので、〈ミニチュア対話型／実人生優位タイプ〉とした。

3回目の制作では、「このミニチュア棚を見た段階で、猫を2匹置いて、この猫を向かい合っている感じにしようみたいなのがあって、(中略)じゃあ向かい合っている場合には、今の季節はなんだろうとか、どんな場所なんだろうって考えた時に季節がまったく違うとか気候がまったくちがう所においてそれが向かい合っている感じ」に箱庭が作られていった。2匹の猫のミニチュアから箱庭の方向性が決まり、投影内容は内的イメージの世界なので、〈ひらめき型／内的イメージ優位タイプ〉とした。

4回目では、「今日はなんとなく、昔のこととかを思い出すことが多くて」、「あんなことも

あったな、こんなこともあったなみたいなものがどんどん出て来てしまっ」とミニチュアから過去の出来事が浮かんで来てそれに即して制作していた。「どんどん過去に遡っていった感じ」と語り、箱庭世界も制作者の小学校時代の世界を表現していたため、〈ミニチュア対話型／実人生優位タイプ〉とした。

研究協力者C

1回目では、「ブランコが最初に目に止まって、使おうかなって思って」、「なんかこのブランコが揺れていて、私が置いたときに、それで揺れちゃったんですけど、揺れているのを見て、誰かが座って、さっきまで座ってたけど、今いなくなってブランコだけが揺れているみたいなイメージで、誰も人がいないんだなってなりました」とブランコによって、漠然とした感じではあるが内的イメージが一気に広がっていったため、〈ひらめき型／内的イメージ優位

タイプ>とした。

2回目は、「あんまりイメージが湧いてこないというか、これ作ろうみたいなのが全然浮かんでこなかったからとりあえず置いてみたけど、なんかしっくりこないみたい」と箱庭のイメージが広がらなかった。しかし、ブランコに対しては「雰囲気落ち着く」と感じたり、「柵を置かないと砂が流れていってしまう感じがして、食い止めるイメージで置いて」と砂が流れ落ちてしまうイメージが浮かんだりと内的なイメージは動いていて、箱庭全体としては川が分断しているつながらない二つの世界の表現となった。<不活性化型／内的イメージ優位タイプ>とした。

3回目の制作は、「いつもいざ箱庭作ろうと思うと池作れないんですけど、なんか今日は作れました。」と制作者の中でこれまで制作した箱庭とは違う感覚があった。「池作ってから外側に広がっていくイメージが自分の中にある、なんか池が自分の中心の中にある、イメージとして。それが次、動物みたいな。動物作り終わったら次は植物おきたいって、どんどん外側に広がってきた感じ」と池を中心にイメージが広がっていき、「動物たちがなんか自分の大切なものを池に投げているっていうイメージで作って。大切なものって具体的に出てこないんですけど、自分の大切なものを池になげて、でもこれは全然悪いものではなくて大切なもの。捨てるではなくてここに投げて眺めているみたいな」と内的なイメージが広がっていった。<ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ>とした。

4回目の制作では、「木と休憩する人のイメージがあって、いざ箱庭を目の前にしたら川を作ろうってイメージが流れていって、最初はここだけ（木を囲うように円形に）川を作ろうと思ったら、周りの砂いらなくなって思い始めて、砂をどけて、全部ここ水にしたい」と感じ、「水の中に陸がポンってあるようにしよう」というイメージになっていった。パンダの隣に透明なビー玉を置いた時に「あ、パンダの大切な

ものだなんて自分の中で思っ」と前回に引き続き大切なもののテーマが現れた。制作前から持っていたイメージが制作を通してどんどん広がっていったため、<ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ>とした。

研究協力者D

Dは、1回目では「海に面した街の住民」や「人嫌っぽい感じのおじいさんが自給自足をして住んでいる」など置いたミニチュアによってイメージが活性化しており、投影内容は現実のものではないことから<ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ>とした。

2回目の制作では、大きい恐竜や人のミニチュアを置いていくうちに映画のパレードのワンシーンが思い浮かんできて、「精神世界というか全部存在しないもの」の世界を表現していったため、<ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ>とした。

3回目は「砂を見て、お砂場を思い出し」、それからアニメのシーンが連想された。そのシーンは少年がひとりぼつんと砂場にいるシーンで、「すごい悲しい気持ちになる、寂しい感じがある」と語る。箱庭では、砂場を含め、左半分は自分の嫌いなものを置いていき、「そうするとそこから自分を守らなきゃいけない」と中央に好きな果物を置いて、右半分は好きなものを置いていった。<ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ>とした。

4回目の制作は「物というよりは砂を使ったものをやりたいなと思って」、「今日は気分的に無機物感のあるものを使いたい、使おうって感じだった」と砂に正方形の模様をつけていく。投影的というよりも、「作業」としての箱庭制作である。ただ、造形を通して「無機物」「規則的」という内的なイメージは見られるため<投影不活性化型／内的イメージ優位タイプ>とした。

研究協力者E

1回目の制作では、箱庭を目の前にした時に「この形がまず目に思い浮かびました」と壺状

の地形が浮かび、手前から奥に向かうような方向が決まったという。ゴリラやクジラを置いた時に「対決するようなイメージが浮かんできて」、動物たちが観音菩薩へと立ち向かっていく作品となった。奥にこちら向きに置かれた観音菩薩に対峙するように、多くの動物が置かれているが、動物たちは手前から奥に向かって進化の状況も表している。ミニチュアを置いていくうちにイメージが展開し、内的にイメージが

広がっているため、＜ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ＞とした。

2回目では、始めはイメージが湧かなかったと語るが、「山を作った時にそこから飛び出てくるようなイメージ」が浮かび、滝を選んで置くと「そういう飛び出して力強いというか激しいイメージではなく、島っぽいような、孤島っぽいような、そういうようなものがイメージが浮かんできました」「穏やかな心地いいという

表4 研究協力者A～Eの継続的箱庭制作の分類

	投影の仕方	投影内容
A-1	ミニチュア対話型	実人生優位タイプ
A-2	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ
A-3	投影不活性型	説明優位タイプ
A-4	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
B-1	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
B-2	ミニチュア対話型	実人生優位タイプ
B-3	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ
B-4	ミニチュア対話型	実人生優位タイプ
C-1	ひらめき型	内的イメージ優位タイプ
C-2	投影不活性型	内的イメージ優位タイプ
C-3	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
C-4	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
D-1	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
D-2	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
D-3	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
D-4	投影不活性型	内的イメージ優位タイプ
E-1	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
E-2	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
E-3	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ
E-4	ミニチュア対話型	内的イメージ優位タイプ

感じ」とイメージが展開していった。作りながらイメージが展開し、置いたミニチュアによってイメージが影響を受けているので、〈ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ〉とした。

3回目は、「頭の中にお岩さんが浮かんでいて、バックボーンとして人としてのよさというか、ただ悪いだけでなく二面性のあるキャラクターが元々ミニチュアにあるなって思っていたので、そういう二面性というか、単純に悪いものだけじゃないっていうミニチュアに惹かれまして」とお岩さんのミニチュアから、内的イメージが展開し、その他のミニチュアもこの肯定・否定の二面性のテーマで捉えられることがインタビューを通じて理解できた。お岩さんはひらめき型に分類するほどには強く箱庭全体を導いていくイメージではなく、それぞれのミニチュアとの対話を通して、上述した肯定・否定のダイナミクスが表現されていたので、〈ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ〉とした。

4回目の制作では、「何もイメージがわからないのが、頭の中ごちゃごちゃしてるからだなんて思って、それをそのまま表現しようかなと思ったらこんな感じになりました」とさまざまなテーマがそれぞれ浮かんできたことが伺われる。制作途中で「前は未開の部族が海に出て行くってテーマで作ったんですけど、それがまた思い出されました」と前回のテーマも取り入れていく。最後に「自分を制限してくる存在」として赤鬼が思い浮かんだ。ミニチュアを置きながら少しずつイメージが展開していったことから〈ミニチュア対話型／内的イメージ優位タイプ〉とした。

V. 考 察

本研究では投影の仕方として「ひらめき型」「ミニチュア対話型」「投影不活性型」の3つの型を仮定して、5名の研究協力者の箱庭体験の分類を試みた。分類そのものはそれほどの困難はなかった。

一方、投影内容の分類であるが、「優位」と名付けてあるように、箱庭体験としては想像的であり創造的な内的イメージが展開していく体験と、箱庭制作を通じて、実人生が投影され、想起される体験は混在するものである。したがって、どちらが優位であるかという点で、2度にわたって話し合う必要があるデータもあった。たとえば、A-1、B-1など。しかし、どちらが優位であるかは、話し合いを通じて分類可能であった。

したがって、予備調査と同様に、投影の仕方と内容をそれぞれ3つずつにわけて箱庭体験を捉えることは可能であることがわかった。

そして、この分類が箱庭体験を分析するときに、どのような意味を持ちうるのかという点を、研究協力者の体験を細かく分析していくことで考えていきたい。

特に、4回の継続的な箱庭制作において、小野澤のデータではこの分類は箱庭制作者内で、変動が少なく、かなりの一貫性があったが、本調査ではD、Eのようにほぼ投影の仕方でも投影内容も一定している者がいる一方で、A、Bのように変動する者もいた。Cも投影内容は一定であったが、投影の仕方は揺れがあった。この背景について考察することで、この分類を使って箱庭体験を捉える有効性を探っていく。

Aは、以前（池田，2018）の研究協力者であり、今回の箱庭体験からおおよそ3年前には、〈投影不活性型／実人生優位タイプ〉だったが、第1回目の箱庭制作では、以前に比べ、箱庭の構造が明確になり、「置きたいものも置けたし、結構この山も気に入っていて」と述べている通り、イメージ体験がより自我親和的になっている。水車小屋のミニチュアからイメージが膨らむ体験もしている。この3年間にAは専門職としての仕事を続け、心的な成長があったようである（写真1）。

1回目は、〈ミニチュア対話型／実人生優位タイプ〉と分類されている通り、投影の仕方が、「投影不活性型」から「ミニチュア対話型」

に変化していて、上述のAの変化を反映していると推測できる。そして、1回目は、3年前同様に、実人生を背景にした箱庭制作という形は同じであるのも印象的である。

2回目では、箱庭制作がより内的体験を直接表現するパターンに変化していく。Aは、最初に手に取った花と木のミニチュアから「生け花みたいにしたいと思っちゃって、そしたら花瓶が必要だな」と感じ、砂を花瓶に見立てる造形を行い、この生け花や花瓶のイメージが箱庭の方向性を決め、イメージが一気に展開していく。〈ひらめき型／内的イメージ優位タイプ〉である（写真2）。

イメージ体験の自我親和性が、「ひらめき型」という少数のミニチュアなどとの出会いから、箱庭全体の方向性が決まるという制作体験となり、内的イメージが豊かに表現されたことが、それまでとは異なる「内的イメージ優位タイプ」に分類されることになる。インタビューを丁寧に見ていくと、ひらめきによって箱庭が構造化され、内的イメージとして表現された箱庭から、逆に自分自身の現在のあり方を、Aは捉えていることがわかる。つまり、箱庭作品から自分の現在のあり方をフィードバックされているのである。

「なんか外枠が完成したというか、壺ができて上に花があって、(中略)ビー玉でお水を作って、あとこの辺とかどうしようかなって考えてたら、なんでそう思ったのかはわからないんですけど、こういうふう(下から上に)上がって成長していくようにしようと思って、(箱庭全体に表現された「壺」の下の方に置かれている)亀が。奥に行くにつれて成長して花をさせますよってなったらいいんじゃないかって思って、亀さんがここから登って行くようにして階段とかも置いた。この石(壺の底の方に金銀の石が「原石」のように並べられている)が上に比べて少ないなって思って、だんだん自分と重なっているような感じがして、やりたいこととか目指すこととかいっぱいあるんですけど、下積みというか蓄えが全然なくてどこかで供給し

なくちゃと思って、石を作る人たちを作って、原石を持ってきてくれるクジラがいて、ここに置いてくださいってしてるクマたちがいて、若干一人サボっているんですけど。たぶん私の頭の中、サボっているやつが何人かいるのでこんな感じかなって思って、最後にこの辺を置きました。(アンダーライン筆者)

「外枠が完成した」とは、もちろん箱庭の表現であるが、A自身の職業人としての方向性がある程度決まってきたこととも関係しているだろう。そして、内的イメージとしての花瓶と花々の表現に、花々は、おそらく「やりたいこととか目指すことがいっぱい」あるAの気持ちと重なり、壺の底の方の原石をめぐるイメージが、職業人としての「蓄え」の大切さを感じている自分自身を思い起こさせている。大切なのは、〈ひらめき型／内的イメージ優位タイプ〉に分類されている通り、自分のあり方を表現しようとしているのではなく、箱庭表現からいつの間にか自分自身のあり方を見出している(「だんだん自分と重なっているような感じがして」)ということである。

こうした大切な箱庭体験をした後で、3回目になると停滞した感じになる。分類としては、〈投影不活性型／説明タイプ〉となる(写真3)。制作後のインタビューでも投影について語られることはほとんどなく、説明的な言葉が多い。そもそも、前回と違い、「うまく自分の中で広がらなくて」と述べている。「左側(家が並んでいる)は、それで自分のイメージが止まったというか、なんかイメージと違うな」「全体的に寂しい気もしたんですけど、なんかこれ以上置きたくないような感じがして」「建物系はなんか街並みを作ろうかなって感じで、思い入れもなく置いたというか、埋めるために置いちゃった感じ」などと、どうも思うように制作できないことが伝わってくる。水のイメージで制作したいと思いながら、うまく展開しなかった回である。このころ、仕事のことで迷いや悩みが出ている時期であった。

そして4回目は、〈ミニチュア対話型／内的

イメージ優位タイプ>である(写真4)。前回の<投影不活性型/説明タイプ>から、ミニチュアとのかかわりの中で、内的イメージが活性化している。最初「緑」のイメージが動き、「風の谷のナウシカ」の映画の中で、ナウシカが腐海から持ち帰った植物を栽培している部屋が浮かんでくる。Aによるときれいな水、浄化された水が腐海の植物を通して得られるという。そして、この深い森の世界は、特別な人だけが通れるトンネルで外界と遮断されつつ繋がっている。制作後にトンネルを通れる人と通れない人がいる感じが沸き起こってきて、さらに自分とつながってきた感じを持ち、こちらの世界で迷った時とか失敗した時に入れる世界であり、「癒される場所」だと感じるようになる。

Aの継続的な箱庭制作体験を見ていると、投影の仕方の変化が、制作者の外的・内的体験の変化と関係していることがわかる。また、Aの場合は、投影内容が実人生優位タイプから内的イメージ優位タイプに変化した時に、深い箱庭体験をしている。その一方で、現実生活での悩みが、<投影不活性型/説明優位タイプ>の箱庭制作に関係していた。そして再び<ミニチュア対話型/内的イメージ優位タイプ>の箱庭となり、現実生活の困難を乗り越えていく方向性が示唆されている。このように投影の仕方や内容の変動は、箱庭体験を捉えるときに意味がある可能性を示唆している。

次に同じく分類に揺れのあったBの箱庭を見ていこう。1回目は、<ミニチュア対話型/内的イメージ優位タイプ>である。投げ所としての自分の家を置きたいという思いが、箱庭制作の一つの背景となっているが、現実の家というわけではなく、自分が住むならこんな場所というような作り方になっている。猫はその後の箱庭でも活躍するミニチュアであるが、すでに1回目から、まず家の近くに置かれている。川によって分割された二つの世界というテーマで、手前側は、動物が放牧されている世界で、自分の家がある奥側の世界から車で橋を渡っている

という場面である。「旅立ちのテーマ」ともいえる箱庭で、初回にふさわしい。旅立ちの箱庭であるから、まだそれほど内面に深く入っておらず、投影や内的イメージも強く活性化しているわけではない。

2回目の箱庭は、<ミニチュア対話型/実人生優位タイプ>に分類される。ミニチュアとの出会いが様々な投影をよびさましているのであるが(ミニチュア対話型)、いくつかのミニチュアが実人生における重要なできごとと関連しているのである(実人生優位タイプ)。この箱庭でも1回目と同様に、二つの世界のテーマが続いている。ただ、二つの世界の「向こう側」の世界がより具体化してくる。向こう側とは、ひとつには亡くなった人々の世界である。桜の木が呼び覚ました祖母の死(桜の頃に亡くなった)とその傍にお墓があるのであるが、最近亡くなった親戚の死について、制作後のインタビューでいろいろな思いが語られるのである。箱庭制作に実人生の体験が強く影響し、テーマそのものにもその大きな影響が見て取れる。「旅立ちのテーマ」が深化している。ネコのミニチュアは、制作者に近い少女がもう一つの世界に直面している背後に守りとして存在している。

3回目では、そのネコ2匹が向かい合っているイメージが箱庭制作の方向性を決定する。真ん中で川によって左右に分断されている左右の世界に、それぞれ2匹の猫が向かい合い、トンネルが二つの世界をつないでいる。春と秋、墓の代わりに地蔵と井戸であらわされている水を手で触れることができる場所という対比された世界が表現され、<ひらめき型/内的イメージ優位タイプ>と分類できる。

そして4回目には、再び投影内容が「実人生優位タイプ」になる。「いろいろと連想が飽和してくる感じ」とBは述べているが、「一番自分の中でピンとくるものを選んで置いて」という作業を繰り返し、「なんとなく、昔のことを思い出すことが多くて」「あんなこともあったな、こんなこともあったな」とどんどん出てく

る体験をしている。文字通り実人生優位な箱庭体験である。子ども時代の様々な事柄が、箱庭制作を通じて思い出され、振り返っている感じであった。

箱庭体験は、自分の表現した内的イメージに刺激され心的変容が促される側面と、実人生の様々な事柄を想起し整理する側面があるのだが、後者を2回目、4回目と繰り返し、4回目は研究協力の最終回なので、まとめるかのように現実に回帰した箱庭風景を作りつつ、子ども時代の様々な出来事を想起する体験につながっている。投影内容を分類することによって、こうした箱庭制作者の内的な動きを端的に捉えることができる視点としても有効であることがわかる。一方、3回目の投影の仕方が「ひらめき型」になっているが、Aの場合と同様で、内的イメージ体験の深まりの指標のひとつとして使える可能性を示唆している。

Cの場合は、投影内容としてはすべて「内的イメージ優位タイプ」であるが、投影の仕方に変化がある。「ひらめき型」から「投影不活性型」、「ミニチュア対話型」、「ミニチュア対話型」と続く。

言うまでもなく「ひらめき型」は箱庭特有の大切な体験で、一つあるはいくつかのミニチュアが強く制作者の心をとらえ、その体験が箱庭制作の方向性を決めていくことであり、注目する必要性が高いだろう。Aの2回目の花瓶の箱庭体験は、Aにとって、転回点になる箱庭体験であり、現在の自分自身を振り返る契機になっている。Cの場合も、箱庭においたブランコが揺れているのを見て、「それまでいた人が去っていった」という核になるイメージがひらめき、箱庭体験が深まっている。

1回目に、電話ボックスで外界とつながりながら、人が去った世界を体験したCは、2回目では同じブランコを使用しながら、なかなか言語化することが難しい箱庭体験をしている。「今日はしっくりこなかった。あまりイメージがわいてこないというか、これを作ろうみたい

なのが全然浮かんでこなかった。」と語っている通り、「投影不活性型」に分類される箱庭体験である。ただブランコのある部分は柵で守られ、「落ち着く感じ」と語っている。

そこから、3回目の「今まで作った箱庭の中で一番できた気がします」という箱庭体験へとつながっていく。中央に湖が作られ、「外側へ広がっていくイメージ」にしたがって、動物を周囲に配置し、さらに植物をその周囲に配置していく。いわゆる同心円構造をもった箱庭ができあがる。Cの箱庭体験としては、中心から外側へと広がって制作していったと感じているが、箱庭そのものは、動物たちが中心である湖あるいは池に向かって、「自分の大切なもの」を投げ入れている光景である。つまり中心への集中という中心化の箱庭でもある。外への広がりを中心への集中という、相反する心の動きを体験しているものと推測される。4回の箱庭体験の中心に位置づけられるものであろう。ミニチュアと対話しながら、深い箱庭体験が可能になっている。

4回目は、3回目の別バージョンとして、やはり中心に大きな木を置きたいという感じから始まり、水を作りたいと砂をどけていくと、ちょうど大きな木を中心にした島が出来上がることになる。制作後の語りの段階で、水に散らしたビー玉とかおはじきは、前回と同様に大切なものと感じることになり、大きな木の元で、守られるように休息するパンダとその横に「特別感があって惹かれる」透明なビー玉という「大切なもの」を置いた箱庭となる。やはり深い箱庭体験をしているものと思われる。1回目、2回目で提示された人が去った世界の変容体験を3回目・4回目にしていると推測される。

このように投影内容としては同じ内的イメージ優位タイプながら、投影の仕方として「ひらめき型」という箱庭体験様式を通して、孤独感というテーマに出会い、2回目では「投影不活性型」でわかるように、この孤独感のテーマが十分に心に収まるまでには至っていない。しかし、ブランコの部分が柵によって「落ち着く」

という体験はしている。そして3回目で「ミニチュア対話型」となり、投影活動が再び活性化し、孤独感のテーマを乗り越え、心に収めることに成功している。いわば内的世界の再構築がなされていると考えられる。4回目には、この再構築された世界を「ミニチュア対話型」というやはり投影が活性化された体験を通して、大きな木に守られ、大切なものを傍らに置くパンダとして表現している。

Cの場合も、本研究で提案している投影の分類が、箱庭体験を深く解釈していく際の参考になることが示された。

以上、＜投影の仕方／投影内容＞という分類が、A、B、Cの3人の箱庭体験を詳細に見ていくことで、継続的箱庭体験を理解するときに役立つ視点である可能性が示された。

継続した制作時に制作者内で変化の見られるタイプの場合は、本論文で提案する視点を利用して箱庭体験を深く解釈していくことが可能となるだろう。

一方、あまり分類上変化のないD、Eは小野澤(2006)の3名と同様に、投影の仕方、投影内容の視点からは、研究協力者内である程度一定しているタイプと見なせるだろう。つまり、本研究で提案している視点として、制作者内で一定する傾向にある人の場合は、箱庭制作時の投影のタイプとして考えることができるだろう。確かに箱庭療法としての箱庭体験をセラピストとして観察していると、制作者の作品にある一定の雰囲気というものを感じる事が少なくない。つまり、箱庭制作者間の比較などに、この視点が使用できる可能性があるということになる。

VI. 総合考察

小野澤の研究協力者3名と本調査の研究協力者のうち2名(投影内容のみをみれば、Cも一定であり、3名となる)が示しているように、投影の仕方と投影内容は、継続的に制作しても

制作者内である程度一定なものであるのだろう。一方、変動がみられる場合には、そのことに注目することで、研究協力者の箱庭制作体験の理解が深まることは上述した通りである。

「ミニチュア対話型」が箱庭体験の標準であろうことは理論的にも経験的にも推測できることである。一方、とくに「ひらめき型」は、箱庭体験として大切な指標であるだろうし、「投影不活性化型」も実は意味深い体験を内包し、前後の継続的な箱庭体験を見ていく際に注目しておくことが大切であることをA、Cの例が示唆している。

また、投影内容として実人生が語られる場合も、内的イメージ体験という形である場合も、それぞれに意味があるが、継続的箱庭制作をしてもらうときには、その揺れにも注目する必要がある、説明タイプは、そこから内的イメージか実人生かのどちらかの内容へと進んでいければ、深い箱庭体験につながっていくだろう。

とくに内容を見ると、すでに述べたことであるが、内的イメージが実人生の出来事を想起させたり、自らの姿を理解させたりすることもあれば、ミニチュアとの対話を通して、日常的には少し距離のあった実人生の様々な体験が臨床場面では語りとして、セラピストとの間で共有されることにつながっていく場合も少なくないはずである。

VII. 今後の課題

この研究はあくまでも探索的研究であり、＜投影の仕方／投影内容＞を分類しうるのが、分類することが箱庭体験を理解することに寄与するののかということを探ったものである。したがって、今回の研究では分類の妥当性及び信頼性を厳密に検討はしていない。妥当性については、いくつかの研究資料をつかって分析してみたので、ある程度はあると考えられるが、信頼性の方は、もう少し多数の者に分類してもらい、統計的な吟味ができるとなるとよいと考えている。

参考文献

- 千葉友里香 (2015). 箱庭制作後における箱庭と作り手との関係性の変化について——作り手の変容に関する質的研究—— 箱庭療法学研究, 28 (2), pp. 41-53.
- 千葉友里香 (2018). 箱庭療法と心の変容——イメージと関係性の視点から. 創元社.
- 近田佳江・清水信介 (2006). 制作者の主観的体験からみた箱庭表現過程 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 43, pp. 35-57.
- 後藤美佳 (2004). 箱庭表現に伴う「ぴったり感」のPAC分析 箱庭療法学研究, 16 (2), pp. 15-30.
- 平松清志 (2001). 箱庭療法のプロセス——学校教育臨床と基礎的研究 金剛出版.
- 池田有加里 (2018). 「箱庭生成の自律性」に関する探索的研究. 東京国際大学紀要, 16, pp. 1-11.
- 石原 宏 (2002). 箱庭制作者の主観的体験に関する研究——「PAC分析」の応用と「一つのミニチュアを選び、置く」箱庭制作 岡田康伸 (編集) 現代のエスプリ別冊 箱庭療法シリーズII 箱庭療法の本質と周辺, pp. 57-69 至文堂.
- 石原 宏 (2003). 箱庭制作過程に関する基礎的研究——「一つのミニチュアを選び、置く」という箱庭制作の数量的データの検討—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, pp. 455-467.
- 石原 宏 (2015). 箱庭療法の治療的仕掛け 制作者の主観的体験から探る. 箱庭療法学モノグラフ第2巻. 創元社.
- 片畑真由美 (2006). 臨床イメージにおける内的体験についての考察——箱庭制作体験における「身体感覚」の観点から—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 52, pp. 240-252.
- 片畑真由美 (2007). 箱庭制作における制作者の「体験」についての考察——調査の枠内で見られた一事例から 岡田康伸・皆籐 章・田中康裕 (編集) 京大心理臨床シリーズ4 箱庭療法事例と展開, pp. 70-79 創元社.
- 河合隼雄 (1991). イメージの心理学 青土社.
- 河合隼雄 (1969). 箱庭療法入門 誠信書房.
- 河合隼雄・中村雄二郎 (1993). トポスの知——箱庭療法の世界 TBSブリタニカ.
- 河合俊雄 (2002). 箱庭療法の理論的背景 岡田康伸 (編集) 現代のエスプリ別冊 箱庭療法シリーズI 箱庭療法の現代的意義, pp. 110-120 至文堂.
- 木村晴子 (1985). 箱庭療法——基礎的研究と実践 創元社.
- 久米禎子 (2010). 箱庭制作における制作者のタイプとプロセスの関連——合理タイプと非合理タイプの比較—— 鳴門教育大学研究紀要, 25, pp. 232-241.
- 久米禎子 (2011). 2回の連続した箱庭制作における作り手の主観的体験の検討. 鳴門教育大学研究紀要, 26, pp. 213-220
- 楠本和彦 (2011). 箱庭制作過程および説明過程に関する質的研究の試み 佛教大学大学院紀要教育学研究篇, 39, pp. 103-120.
- 岡田康伸 (1984). 箱庭療法の基礎 誠信書房.
- 岡田康伸 (1993). 箱庭療法の発展 誠信書房.
- 岡田康伸 (1969). SD法によるサンド・プレイ技法の研究 臨床心理学研究, 8, pp. 151-163.
- 小野澤光子 (2006). “旅”をテーマとして箱庭制作過程の研究. 東京国際大学大学院 臨床心理学研究科修士論文.
- 齊藤紫をん (1992). 不登校児の箱庭表現に関する数量的研究 箱庭療法学研究, 5 (1), pp. 39-50.
- 塩田泰子 (1994). 箱庭療法における砂と水による表現にみられる特徴に関する研究 箱庭療法学研究, 7 (1), pp. 24-35.
- 田中千穂子 (2002). 体験箱庭療法 岡田康伸 (編集) 箱庭療法の本質と周辺, pp. 113-125 至文堂.
- 田中信市 (2004). 箱庭療法——ここが見えてくる方法 講談社.
- 和田竜太 (2007). 箱庭制作過程における体験をめぐって——身体感覚やイメージの広がり捉える試み 岡田康伸・皆籐 章・田中康裕 (編集) 京大心理臨床シリーズ4 箱庭療法事例と展開, pp. 62-69 創元社.

Abstract

An Exploratory Study on Types of Projective Manner and Content in Sandplay

Yukari Ikeda

Shinichi Tanaka

Sandplay therapy consists in projection activated by miniatures and sand. The first purpose of this study was to examine how participants project and what type of projection predominates. Three types of projective manner were found; “inspiration type”, “dialogue-with-miniature type”, and “inactive projection type”. Three predominant patterns of projective content were found; “real life predominant type”, “inner image predominant type”, and “explanation predominant type”. The second purpose of this study was to examine the shifts in projective manner and projective content in the course of successive sandtrays. There were ones who, producing some sandtrays, were constant type on projective manner and content; on the other hand, there were ones who showed changes in projective manner and content. The latter group’s sandplay experience was able to be understood more deeply by focusing on the change of projective patterns.

フィラーを使用することと不安の高さの 関連について

岡 田 恵 奈

目 次

第 I 章 問題

1. フィラーとは
2. フィラーの種類
3. 心理学研究から見たフィラー
4. 言語連想検査

第 II 章 目的

第 III 章 予備調査

1. 対象者
2. 実施日時
3. 調査内容
4. 予備調査の結果と考察

第 IV 章 方法

1. 対象者
2. 実施日時
3. 調査内容
4. 手続き

第 V 章 結果

1. 有効回答数と分析対象者
2. 尺度の記述統計量と信頼性
3. フィラーの使用頻度と A-Trait および A-State の関係
4. フィラーを使用するタイミングについて
5. フィラーを使用する意図について
6. 性差について

第 IV 章 考察

1. フィラーの使用頻度について
2. フィラーを使用するタイミングについて

3. フィラーを使用する意図について
4. STAI 日本語版について
5. 仮説の検証
6. 性差について
7. 総合考察

第 I 章 問題

1. フィラーとは

石川 (2010) によると、「フィラー」という術語が一般的になったのは1990年代以降のことであり、1980年代までは「言いよどみ」と呼ばれることが多く、ほかに、遊び言葉、場つなぎ言葉など、様々に呼ばれていた。会話の中で沈黙することや、いわゆる「どもり」も言いよどみと呼ぶことがあり、言いよどみは「えーと」「まー」「んー」といった言葉を指すフィラーよりも定義の範囲が広い。

フィラーは、元々はBrown Gregの用語で、発語権維持のために間をつなぐための言葉であるとされているが(定延・田窪, 1995), 定義が統一されているとは言えず、大まかな部分は同様であるものの細かいところは研究者によって違いがある。フィラーは最近の言語学の辞典にも見出し語として載せられていないほど聞き慣れないものであるが、それはフィラーと呼ばれているものの位置付けが難しく、日本語においても英語においてもさまざまな名称で呼ばれてきたからである(山根, 2002)。英語の“filler”には本来、①満たす人 [物], 注入器; ②a (補

強用または嵩を増すための) 詰め物, 充填物, 混ぜ物, b 代用品, c (新聞・雑誌などの) 埋め草記事 [写真], (放送番組の間の) 時間つなぎの音楽放送 [スポットアナウンスなど]; ③ (ルーズリーフ用の) ばら紙; ④ 飼木《2つの材・梁などの間にはめ込んで位置を調整したり支えたりする木片》, (靴の) 靴型, 中物芯; ⑤ (葉巻・紙巻きタバコの) 中身, 中に詰める葉; ⑥ 小型のラジオ [テレビ] 用送信機《受信不可能地域をカバーする》; ⑦ 充当詞《Pikeの文法要素論 (tagmemics) の用語》, フィラー充当 [補充] 語, つなぎ語《口ごもったり間をとったりするときに入れる語》; ⑧ (ワニスを塗る前に表面のすき間を埋める) 詰め物, 目止め; ⑨ (食べ物の量を増やす) 安いませ物, 増量材といった意味がある (小西・南出, 2001)。このように「繋ぐ・埋める」といった意味合いが強いことから, フィラーを会話と会話の目張りといった意味で捉えられることが分かる。

松原 (1996) は「言いよしみ (ポーズ, フィラー)」について, 適当な表現が見つかるまで, あるいは発語内容をまとめたりする時間を稼ぐ機能を持ち, 時にその機能を持たず, 相手の注意をひきつけたり, ためらう気持ちを表したり, リズムを取ったりするために文頭または文中で用いられ, 実質的意味を持たないものと定義づけている。また, 田窪・金水 (1997) は, もともと意味を持っていた「あの」「なんか」「やっぱり」が感動詞として使用されると具体的指示機能を失い, 「探している」「だいたいこんな感じ」「自分の気持ちと合っている」といった「ある種の心的操作, 心的状態」に対応する形式になってしまっており, これらの語彙の用法を研究することは, 現代人の言語心理を浮き彫りにするという点でたいへんおもしろい課題であると述べている。

フィラーについていくつかの役割に分類して定義づけた研究者もいる。Maynardはフィラーを, 命題の意味を持たない発話として捉え, 言語表出に関わるフィラーと, 対人関係のために用いられるフィラーの2種類に分類している

(福原, 2009)。それらの機能について, (i) 沈黙を回避する, (ii) 話の継続を示唆する, (iii) 躊躇や不確かさを表明する, (iv) 発話を和らげる, などの働きがあり, (iii) (iv) はいわゆる対人調節的なものであるとMaynardは指摘している (福原, 2009)。田中 (1981) は, 言いよしみ現象自体を分類し, 「①反復, ②言い直し, ③有声休止, ④無声休止, ⑤その他 (a: 強調, b: 介入音, c: 他の話と区別されるささやき, d: 気が付き, e: 長い沈黙, f: 文内遅速, g: 添音) の5種類に分類したが, 言語連想検査における『反応時間が長くなること』は, ④無声休止あるいは⑤その他 (e: 長い沈黙) に当てはめられるのではないだろうか」と述べている。また, 今回焦点を当てている「えーと」「なんか」などのフィラーは, 「③有声休止に当てはまる」と述べている (田中, 1981)。さらに, 山根 (2002) はフィラーを「それ自身命題内容を持たず, かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない, 発話の一部分を埋める音声現象」と定義づけ, さらに詳細に概念化させてフィラーの果たす役割を以下の5点にまとめている。

①発話権保持のためのフィラー: これについて山根 (2002) は, 「話し手が情報を小出しにしていく際, 聞き手が打つ相づちの後に現れるフィラー」であると説明している。さらに, 「聞いていることを示す聞き手からの相づちは, 話し手の発話を促進する効果をもたらすが, しばしば話し手の発話を中断させることにもなる。そのため, 話し手は発話の立て直しを図り, 引き続いて発話権を保持していくことを示すためにフィラーを使用するのである。ここに位置するフィラーは, 聞き手にとっても有益である。話し手が交替した場合, しばしば発話の重なりが起これ, 発話の冒頭を聞きそこなう恐れがある。小出しにされる情報の冒頭に現れるフィラーは, 相づちと次の情報の重なりを防ぎ, 聞き手が情報を聞きそこなうリスクを減らすことにつながるからである」 (山根, 2002) と説明し, 代表例に「あの (ー)」を挙げている。

②新しい情報を切り出す際の注意喚起の役割を果たすフィラー：これは「相手の発話に相づちを打った後、新しい情報を切り出す際に用いられるフィラーがそれである。『あの(一)』『ま(一)』に代表されるこれらのフィラーは、また発話境界の指標にもなる」(山根, 2002)。

③適切な応答を考えつくまでの時間稼ぎの役割を担っているフィラー：これは「質問や確認の発話に対する応答の冒頭に現れる」(山根, 2002)。

④結果的に発話権譲渡の手助けをしてしまうフィラー：これは「話し手がフィラーで次の内容を模索している間に、聞き手が発話を行ってしまう場合である。そこで話者交替が起こり、フィラーが発話権譲渡に貢献することになるのである。この場合、相手のフィラーをきっかけに強引に発話権を奪うこともあるだろうが、話し手の発話をフォローするに止まる場合も多い」(山根, 2002) という。

⑤話し手の心的態度を表明するためのフィラー：これは「たとえば、質問に対するためらいの気持ちを表すものである。自分の過去や家族についてを語る、その内容に多少のためらいを持つためにフィラーが出現する。『あの(一)』や『ま(一)』が典型的なものである」(山根, 2002) と述べられている。

山根(2002)は上記のフィラーの役割5点に加え、話し手の発話から言及できるフィラーの役割を7点挙げている。「位置として助詞の後が好まれる」間つなぎ、「適切な言語形式を探したり次の言葉を思い出せなかったりして次の発話までにさらなる時間を要する場合は5拍以上相当のフィラーやフィラーの連続」が使用される時間稼ぎ、「談話や発話の冒頭に現れ、話し手がある話題を導入する際に用いられ(中略)、発話の途中で話題を転換することによってなされることもある」話題の切り出し、「発話において特殊な要素が出現する位置を示す指標」となる倒置発話・挿入発話示唆、「言いさした後、別の語に変える場合や同じ語を繰り返す場合」に生じる換言・修正、「話し手が話し

たいこと存在をあらかじめ聞き手に臭わせておく」話題の予告提示、「『こー』『もー』『うん』」などの「話し手が『このように』体験してきた、その体験を聞き手と共有したい気持ちの表れ」である話し手の心的態度表出の7つである(山根, 2002)。

このように研究者によって多少のずれや表現の相違はあるが、ほとんどの人のフィラーの共通解釈としては「会話の指標」が挙げられる。また、フィラー自体に文法的な意味は発生しないかもしれないが、話し手の意図や感情など、あらゆる要素がフィラーとして表現されており、対人調節的なものであると言える。フィラーを多用することは、会話の内容を考えているということも一因として考えられるが、対人調節がそれほど必要であるためだとも考えることができる。また、会話の中で沈黙を作らないようにするため、あるいは適切な言葉を選ぶことに時間をかけるためにフィラーを用いることは、他者との時間的距離を埋める行為であり、他者を気にしているからこそ生まれる表現であると考えられる。「発話をしなければならない」という使命感が強ければ強いほど、会話と会話の間を埋めなければいけないというような感覚が生じるために、フィラーを発する場合もあるのではないかと考える。また、松浦(1996)は「今までで一番怖かった事」を30分話してもらった中で現れたフィラーについて、種類と頻度の統計を行っている。その研究結果によると、「特に30代の男性はフィラーを種類豊富に用いているのに対し、女性は、『あの(一)』と『えーと』の2種類、30代の女性に限っては『あの(一)』1種を半数以上というように偏った用い方をしていることが分かる。また、『この』『その』が男性によく使われている。次に、年代別に注目すると、20代に比べ、30代の方が『あの(一)』を用いる頻度が高いようである。これは『あの(一)』1種を主に用いる30代の女性に限らず、最もフィラーを種類豊富に使い分けている30代男性さえも約半数用いていることが分かる。さらに、各フィラーに注目すると、意外にも

『えーと』の頻度が低いことは分かる。中には全く用いなかった話者も30代男女に各1名ずついた。その他、『そうですね』は他のグループに比べ、30代女性によく用いられている。

このことから、フィラーは性別や年代によって使用する種類が異なることがわかる。フィラーの種類によって会話への影響が異なる場合、性別や年代によってフィラーの扱いや意識が異なることも考えられる。

2. フィラーの種類について

山根(2002)は、先行研究についても、場面ごとのフィラーについても、詳細に調べている。山根(2002)は講演の談話におけるフィラー、留守番電話の談話におけるフィラー、対話におけるフィラー、電話の談話におけるフィラーというように、場面ごとに使用されるフィラーに分類を行い、談話の種類ごとに頻出するフィラーをまとめた。本研究では対人場面的日常会話におけるフィラーを想定しているため、山根(2002)の「対話におけるフィラー」を参考にする。

山根(2002)の対話におけるフィラーについては、テレビのトーク番組やインタビュー番組を会話のデータとして用いている。フィラーが49種類、全出現数が1,394例であったうち、①コソア型、②マー型、③母音型、④モー型、⑤コーソ型、⑥ナンカ型に大別できることが分かった。また、他の先行研究でよく見られる「えーと」や「ん(ー)」は「対話におけるフィラー」の中では特に分類されていなかったため、以上の6種類に加え、⑦その他として分類を行うこととする。

A. コソア型

コソア型とは、「人や物、直前の発話で述べられたことを支持する以外に用いられる『この(ー)』『その(ー)』『あの(ー)』であり、『あのね』など助詞が付加されたものも含む」(山根, 2002)。定延・田窪(1995)によると、「あの(ー)」の基本的作用は、「話し手が言語編集

という、聞き手の存在を予定する心的操作をおこなっている際に用いられる。この心的操作は具体的には、名前の検索と、適切な表現の検討に二分される。(中略)名前の検索とは簡単に言うと、モノ自体はわかっているが、モノの名前が思い出せないと言う場合の心的操作である。具体的には、話し手の意識を心的バッファから、そのものに関する情報が格納されているデータベース内の該当箇所に戻し、そこで属性のひとつである名前を検索するという操作である。(中略)他方、適切な表現の検討は、言いたいこと(これはすでに漠然とせよ定まっている)に適した言い方に心的バッファで編集するという操作」である。「あの(ー)」について、松浦(1996)は、「20代に比べ、30代の方が『あの(ー)』を用いる頻度が高い」と述べている。松浦(1996)は「あの(ー)」について、「時間稼ぎの機能として多く文中において、話す事柄が想起された後の、発話内容の整理や適切な表現選択の際に用いられる。話者交替後の文頭において用いられた場合には、時間稼ぎの機能だけでなく、相手の注意を引きつける機能を持つこともある。話者交替が行われず、現在の事柄について述べたり、自分の意見が述べられたりする場合には、『あの(ー)』が好まれる」と述べている。

山根(2002)の「対話におけるフィラー」研究において「この(ー)」「その(ー)」が出現する数は非常に低く、「あの」系がコソア型の8割を占めていたという。小出(2006)はコソア型について詳細に説明している。「この(ー)」の機能は「発話時に心的に思い浮かべられている内容があるが、その表現形式が確定しておらず、実時間的に形成されつつあるものであることを示す。これは同時に、聞き手には表現形式が模索中であるというマークにもなる」(小出, 2006)と説明している。また、「その(ー)」は「後続する発話内容が、話し手にとって非関与的(話し手に関わりがない、あるいは、聞き手・話し手双方に関わりがない)領域のものであること、あるいは、話し手が独占的に関与す

るものとは主張できない、しないものであることを示す」(小出, 2006)。小出(2006)は、さらに、コソア型の会話の中での機能と相互関係について述べており、「この(一)」は「ひとまとまりの内容の開始部の表示」, 「その(一)」は「談話参加者と談話内容の領域との関係表示」, 「あの(一)」は「コミュニケーションの開始, 談話ステップの移行, 談話形成に関する対人的調整」と説明している。コソア型は「対人的な場面でのみ現れる。(中略) 後続内容が参加者とどのような関係にあるかを表示することによって, そのような対人的配慮を表現する機能を果たしている」(小出, 2009)と論じている。

B. マー型

山根(2002)によると、マー型とは、『ま(一)』『まーね』など、『ま』の長短、『マー』の後に助詞が付加されたもの。『まあ きれい』のように感動や驚きを表す『まあ』は含めない」と定義されている。また、他のフィルターとは異なり、「まー」は「副詞としての用法」(富阪, 2002)を持つ。また、富阪(2002)は『『まー』(富阪は「まあ」と表示)を用いた発話は聞き手に対して押し付けがましい印象を与えない。それを唯一のものとして主張するのではなく, そのような主張も可能性の一つとして存在するものとみなして提示するからである」と述べている。小出(2009)は、「ま(一)」について注釈, 例示, 見解表示, 発話ポイント, 引用, 談話の区切りで用法区分を行った。これらの内容が話されるときに「ま(一)」が出現する。

C. 母音型

「あ(一)」「え(一)」などの母音によるフィルターである。なお、山根(2002)の「対話におけるフィルター」では、「『イ』で始まるフィルターはまったく出現しない」とのことである。小出(2009)によると、「え(一)」は「新しい談話の開始, 話題の開始(旧話題からの転換)」, 「談話の新しい局面への移行」, 「談話の中心プラン

に沿った発話であること」, 「質問を受けた時など, 内容や表現を調整するための心的スペースを作り出す」, 「反応を遅延させ, 時間的な距離(スペース)を作り出す」機能がある。

D. モー型

山根(2002)はモー型を『『もー』『もーね』など、『も』の長短、『もー』の後に助詞が付加されるもの。『もう5時だ』のように『既に』の意味を持つもの, 『もう来るだろう』のように『じきに』の意味を持つもの, 『もう一つどうぞ』のように『さらに』の意味を持つ『もう』は含めない」と述べている。小出(2009)は「もー」(小出は「もう」と表示)について基本的な意味を示した上でフィルターとしての用法を、「話題の事柄の成立を当然のことと見る姿勢と連動する用法」, 「話題の事柄が特筆すべき経験であるとする姿勢と連動する用法」, 「心情としての『もう』」の3つに分けた。小出(2009)はさらに、「もー」のフィルターとしての特徴として「内容についての姿勢の表現というようなことがあるのではないと思われる。(中略) 話し手の心的な昂揚が, 文という容器からあふれ出て表出されたもの」と解釈している。小出(2017)によると、「もー」は発話冒頭には現れず, 呼応する修飾先が特定できない特徴がある。

E. コーソー型

『『こー』『こーね』『そー』『そーね』など、『こ』『そ』の長短、『こー』『そー』の後に助詞が付加されたもの。『こう 友だちがいつも担いで』のように, 話し手が動作などでその状態を示すときに使用される『こう』は含めない。また, 応答の冒頭に来た『そーですね』は, 相づちととらえ含めていない」(山根, 2002)。山根(2002)においては「こー」はコーソー型としてまとめられているが, 小出(2009)においては, コソア型の副詞形としている(小出は「こう」と表記)。同じく副詞形にした時に, 「そー」(小出は「そう」と表記)や「あー」(小出は「あ

あ」と表記)に関して理由は定かではないが応答詞や相づちの印象が強いようで、フィラーではないと述べている。しかし、山根(2002)では「そー」はコーソー型として、「あー」は母音型として分類されている。小出(2009)は「こー」を「心的に思い浮かべられたイメージ(表現対象)について、そのイメージを心的に走査しながら、それを表現する形式の模索が行われていることを示す」と説明している。

F. ナンカ型

福原(2009)によると、『なんか』は従来、代名詞・副詞として、発話の命題内容を構成する要素であったが、それがいわゆる若者特有の用法においては、主体の発想や発話態度を構成するものになっている。渡邊(1997)によれば、『なんか』には連語の『なにか』という意味と助詞の『など』という意味があり、一方、川上(1992)は「不定の注釈的表示と、その不定意識に基づく言語表現化志向」だと述べている。内田(2001)は、「なんか」の「前置き表現」について、①話題開始、②話題の発展、③話題内容の具体化、④次の部分へのつなぎ、⑤引用、⑥話題対象への評価の6つに分類した上で、ディスコマーカ―としての「なんか」には①「何かその後に新しく言いたいことがある」、②「話題になっている事柄のうち、それまでの話の流れからは予測できない事柄を際立たせる」側面があると述べている。田窪・金水(1997)は、「なんか」を「指示機能のない言いよどみの感動詞と分類し、『大体こんな感じ』という『心的状態』に対応する形式」になっていると述べるなど、「なんか」の文法的な解釈がなされている一方で、松浦(1996)は「20代では『なんか』が多く用いられており、特に20代女性は、用いるフィラーの約半数に『なんか』を用いている」と指摘している。このことから、「なんか」がフィラーとして用いられるようになったのは最近のことであり、特に女性が使用することが示唆されている。

G. その他

その他、山根(2002)の「対話におけるフィラー」の分類には当てはまらなかったフィラーには「えーと」「ん(ー)」などがある。「ん(ー)」は『「ん(ー)」』『んーとね』『うーん』『うーんと』など、『ん』の長短および『うーん』と、それらの後に『と』や『と』と助詞が付加されたもの(山根, 2002)である。

松浦(1996)は「えーと」について、「時間稼ぎの機能として、多くの話者交替後の冒頭において、頭の整理を行い、話す事柄の想起の際に用いられる。話す事柄が想起された後にも関わらず、話者交替後に用いられた場合には、相手の注意を引きつける機能を持つ。話者交替後、数的情報が核心部分になっている場合、或いは未だ話すべき事柄が想起されていない場合には、『えーと』が好まれる」と述べている。小出(2009)は、「えーと」は応答する時、誤解に基づく質問などに対する対応する際、知悉していることがらについて聞かれた場合、質問の冒頭、話題の切り替えの5つの場合に表れると説明している。また、基本的には「心内に発話に必要な情報、あるいは、表現形式が形成されていないことに気づき、その空白を埋めるために、情報形成あるいは表現形式形成のための心的活動に入ろうとする状態」であり、「えーと」は「談話プランとのかかわりを表示」したり、「それまでの心内の作業内容をクリア」したりする機能があるということである(小出, 2009)。また、高木・森田(2015)は「えーと」について質問後の応答開始部分に生じる点に注目し、「①質問が求めている特定のあるいは厳密な情報を『慎重に』提示する応答の開始部分、②質問にどのように応えているかがただちには明確でない応答の開始部分、③質問に示された質問者の推測に反する応答の開始部分」の3つの要素を見出した。さらに、高木・森田(2015)は「えーと」を「応答のターンの開始部分で用いることは、相互行為の進展が阻まれているように見える事態において、『今ここ』の状況についての問主観性を確立し、相互行為の前進を

約束するために利用可能な手続き」であると述べている。

上田 (2005) は「いや (ー)」もフィラーとして取り扱っており、心的態度の表出のひとつとして機能し、「心情の高ぶり」を表すとしている。上田 (2005) の調査によると、「いや(ー)」は50代に多く表れる。

さらに、定延 (2010) は「フィラーというのは『絶望的』になり得る」と、フィラーとしての「さー」の「絶望性」に言及している。「後続する発言内容が相手の期待に沿わない」というフィラーの性質を「否定的性質」とすると、「フィラーの否定的性質が例外を持たないこと」を「絶望性」とする (定延, 2010)。「『さー』の後に話し手が続ける発話内容は必ず、会話相手の期待に沿わないこと」 (定信, 2010) が続くため、「言いよどみ」というよりも「話題の否定」と受け取れる。これをフィラーとするにはやや疑問があるが、定信 (2010) は「『さー』にかぎらず、会話においてフィラーを発するとは、そのフィラーと結びついている認知行動 (中略) をあからさまにおこなうこと」であるとフィラーのあり方にも触れて述べている。

3. 心理学研究から見たフィラー

田中 (1981) によると、「Freudが“言い間違い (speech slips)”を抑圧された欲求によるものと考えたように、言いよどみの心理的機制についても、不安などの情緒的要因を仮定するアプローチがあった。しかし、Maclay & OsgoodおよびGoldman-Eislerの古典的研究以来、言いよどみは発話を妨害する言語外的な (extralinguistic) 事象ではなく、発話過程に内在する (intrinsic) 現象であるとする認知論的アプローチが急速に台頭し始めた」と述べている。とはいえ、何らかの原因があって会話をスムーズに行えない、あるいは行わないということは、少なからず心理力動的な働きが生じているのではないかと考える。Freud (1917) は、失錯行為について言及する中で、「名前や計画の失認」も失錯行為であるとし、「二つの相異なる意向の干渉の結

果生ずるもの」である心的現象だと述べている。失錯行為とは、「一つの意識的な意図がそれに対する無意識的な意図によって妨害され、抑圧される結果、一種の妥協形成が起こって生じるもの」 (成田, 2004) である。会話の中で名前や計画などの失認が生じた場合、多くの人がフィラーを使用するのではないかと考える。このことから、フィラーは表面的には場をつなぐための言葉であるが、その奥深くには何らかの心的な働きがあるのではないかと考える。

4. 言語連想検査について

河合 (1967) は、Jungの行った言語連想検査について、「彼は簡単な言語の連想において、反応時間が相当遅くなる事実を認め、それは知的な問題というよりも、むしろ情緒的な要因によって起こると考え、これを臨床的に応用しようとして、言語連想実験の方法を確立したのである。(中略) 簡単な連想過程において、多くの障害が生ずる点に注目して、Jungは連想実験によって無意識の心的過程の研究を行った。われわれの連想を妨害するもの、すなわち、意識の制御の及ばぬ心的過程の存在を認めざるをえないと考えたのである」と述べている。また、Jung (1905) は、「言語連想検査において、一般に刺激と反応の間に感情色調のある意識内容が入ると、反応時間は平均的に言ってそうでない場合よりもかなり伸びる」と指摘している。

以上から、簡単な単語の言語連想における反応時間の長さは、無意識的かつ情緒的な要因によることがわかった。日常会話は、話者が自身の経験や知識を背景に、相手との関係やその場の雰囲気、状況によって成り立つ。言語連想検査とは異なり、より複雑で様々な要因から生じるものではあるが、反応を遅らせるという行為において共通する部分があると考えられる。このことから、会話において発言を行う前の無意味な発語、つまりフィラーを多用することは、何らかの心的な抵抗の表れだと考える。その背景には不安の要素が含まれており、フィラーを使用することによって不安の解消を行っている

のではないかと考える。

第Ⅱ章 目的

現在の言語学研究においてフィラーは、会話における談話指標のひとつとして研究が進められており、日常で誰もが使用する言葉である。しかしながら会話の中で発生する無意味な挿入語（フィラー）を多用することについての心理学的研究は少なく、日本ではほとんど行われていない。会話の中で「えーと」や「なんか」といったように言いよどむことは誰しもがある経験だと考えられる。しかしながら、このような現象が日本であまり研究されていないということは、少々不思議である。誰もが使用しているのにあまり研究されていないという部分に、“何気なく発せられている”というフィラーのあり方がそのまま表されているようにも感じられる。

フィラーがあっても会話に直接影響することは少なく、フィラーは発言者の感情がそのまま自己防衛的に表出された言葉として考えることもできる。フィラーを使用して沈黙を避けることによって相手との時間的距離を詰めたり、発言への抵抗感を示したり、あるいは他の心の動きがフィラーとして表現されている可能性も考えられる。相手との時間的距離を詰めることは対人不安的な背景が考えられ、発言への抵抗感や発言自体に嫌悪感がある場合や不安がある場合が考えられる。また、「発話をしなければならぬ」という使命感が強いほど、間を埋めるためにフィラーを発する可能性もあるのではないかと考える。このように、フィラーと不安には何らかの関係性があると考え、フィラーを理解し、フィラーをより多く使用することと不安の高さの関連を研究することにより、臨床場面への一助となることが本研究の目的である。

本研究でフィラーと不安の高さの関連を調べるにあたり、次のような3つの仮説を考える。

①フィラーには不安を一時的に下げる効果があり、フィラーを使用する人の方が、一時

的に不安が下がる。

②フィラーには一時的に不安を下げる効果があり、フィラーをあまり使用しない人の方が一回の使用価値が高まるため、フィラーを使用している時には一時的に不安が下がりやすい。

③フィラーには不安を下げる効果があり、フィラーを使えば使うほど特性的な不安も一時的な不安も下がっていく。

また、フィラー研究はどれも古いものが多い、現代におけるフィラーの使われ方はどうであるかについても不明な点が多く見受けられる。本研究では上記の仮説を検証するだけではなく、現在におけるフィラーの使われ方や傾向についても検証を行う。さらに、今回はあくまでフィラーが使用される頻度と不安の関係を検討するため、フィラーの定義について言及は行わないものとする。

第Ⅲ章 予備調査

先行研究を調べた限り、フィラーに関して質問紙等で実証的なデータをとっていた研究は見当たらなかった。すなわち、フィラーについて質問するためには、本研究で用いる質問項目を作成する必要があることがわかった。そのため、会話における「フィラー(言いよどむこと)」についての質問を予備調査として行った。

1. 対象者

大学院生を対象に、12名に調査を行った。

2. 実施日時

2018年6月に行った。

3. 調査方法

大学院生に質問紙を手渡しして、予備調査への協力を求めた。質問紙の冒頭に「日常会話を行う中で、自分が発言を行う前に『ええと』『あのー』『なんか』など、会話には直接関係のない言葉を言うことがあるか」と思います。これを

『フィルター』というのですが、これから、フィルターについての質問を行います。できるだけ思いつく限りお答えください。」と教示文を示した。その上で「1. 会話において、あなたが使用するフィルターの種類を教えてください。」「2. 1であげていただいたフィルターはどのような時に使用しますか。」「3. 1であげていただいたフィルターにはどういう意図や意味があると思いますか。」と質問を行い、自由記述形式によって回答を求めた。

4. 予備調査の結果と考察

A. 使用するフィルターの種類

使用するフィルターの種類は全部で51種類の回答が得られた。その中でも最も多かったフィルターの種類は「んー」であり、7名が回答をした。「んー」に次いで多かったフィルターは「なんか(6名)」「えー(5名)」「えーと(5名)」である。

今回の調査では、本来であれば謝罪の意味となる「すみません」がフィルターとして扱われていた。「すみません」は会話と直接関係のない言葉であるフィルターとしては考えにくく、調査協力者にとっての「フィルター」の意味が非常に広範囲であるように感じられた。中村(2007)は、フィルターは「場合によってはあいづちとの境界が曖昧」であると述べている。石川(2010)によると、相づちは『相手の事情を考慮』して表出されるものであり、フィルターは「発言自身の都合によって表出する」。「フィルター」という概念が研究者間でも明確に区切られておらず、今なお曖昧さを携えている中、質問紙によるフィルターの種類を回答することは少々難しいものであることがわかった。

また、この予備調査は「日常会話を行う中で、自分が発言を行う前に『ええと』『あの一』『なんか』など、会話には直接関係がない言葉を使うことがあるか」と思います。これを『フィルター』というのですが、これからフィルターについての質問を行います。できるだけ思いつく限りお答えください」とフィルターについて簡易な説明を行った後に「会話においてあなたが使用する

フィルターの種類を教えてください」と質問を行った。予備調査の結果では「ええと」の種類が最も多く回答を得たことから分かる通り、直前の説明で具体的な例示を行ったために多く回答された可能性が考えられる。この質問は、フィルターの種類によって不安の程度が変わるかどうかを知るための指標として質問項目の作成を試みたが、山根(2002)によると、「性別・改まり度・年齢・役割・個人差・発話量について(中略)談話の種類がフィルターに及ぼす影響が大きい」と述べられている。また、「年齢差にしても、一部のフィルターにおいては30代と40代が分かかれ目となって、種類に異りがある」(山根, 2002)ため、年齢によってはどのようなフィルターが用いられるかが異なる可能性がある。また本研究では大学生を対象に調査を行うため、フィルターの使用種類については偏りのある結果になることが予想される。よって、本調査ではフィルターの種類は聞かずに、使用頻度のみを聞く質問を行うこととした。

B. フィルターを使用するタイミング

フィルターを使用するタイミングについては、合計43個の回答が得られた。そのうち、同じ種類の回答をまとめた結果、会話が生じる前の「相手に話しかける前」、相手の発話中あるいは発話後の「相手が発話している最中に言いたい事がある時」「話の内容を理解しようとしている時」、発言と発言の間に生じる「返答に困った時」「沈黙した時」「発言内容や言葉を考えたり、思い出している時」「慎重になっている時」「相手に気を遣っている時」「恥ずかしい時、恥ずかしい内容の時」「相手が理解してくれるか不安な時」「発言に自信がない時」、自分の発言に対して起こる「癖・日常的に使用する」、会話全体に当てはまる「目上の人と会話する時」「緊張する時」の14種類に分けられた。

最も回答が得られた種類は「発言内容や言葉を考えたり、思い出している時」であり、合計15個の回答が得られた。「目上の人と会話する時」は、非常に限定的な場面であるが、不安を

想起しそうな場面であると考えられた。

C. フィラーを使用する意図

フィラーを使用する意図では33個の回答が得られた。フィラーを使用するタイミングと同様に、同じ種類の回答をまとめた。その結果、「考えるため」「考えていることを相手に示すため」「発話権の保持のため」「雰囲気をやわらかくするため」「間を埋める、間をつなぐため」「自分が話を納得するため」「相づち」「自分のペースを保つため」「感情表現」「理解してもらいたい」「自分に注意を向けてもらうため」「下手（したて）に出る」「強調するため」「説得するため」「無意識に行っている」という、15種類に分けられた。その結果、最も回答が多かったものは、それぞれ8個の回答が得られた「考えていることを相手に示すため」と「間を埋める、間をつなぐため」であった。

第IV章 方法

1. 対象者

関東地方の私立大学の大学生332名に質問紙調査を行った。

2. 実施日時

2018年7月から9月に実施した。

3. 調査内容

質問紙に用いた質問項目は以下の通りである。

A. フェイスシート

年齢、性別の記入を求めた。

B. STAI日本版 (State-Trait Anxiety Inventory: 状態-特性不安検査) (清水・今栄, 1981)

曾我 (1983) はSpielbergerを引き合いに「不安とは、恐ろしいという判断を基礎にした、恐怖の予期などの不確かな心理的要因が随伴する情緒である」とし、特性不安 (trait-anxiety)

と状態不安 (state-anxiety) というタイプの異なる2種の不安が含まれると仮定した。特性不安 (以下、特性不安についての尺度をA-Traitと呼ぶ) とは、「人格とも言うべき生来もっている不安」であり、一方、状態不安 (以下、状態不安についての尺度をA-Stateと呼ぶ) とは、「有害なものとして判断したとき短時間に誘発される不安状態」である (水口・中下・中里, 1991)。STAI日本語版は、特性不安と状態不安をそれぞれ20項目の質問によって測定する。今回は、両方の下位検査を使用し、A-Stateに関してはフィラーを使用した時の状態を思い出してもらって評定することとした。

STAI日本版は1981年に作成されたこともあり、対象者となる現代の大学生とは言葉遣いのニュアンスが異なる部分があった。質問紙の内容や文の意味が変わらない程度に、予備調査によって受けた指摘を元に改変を行った。以下に変更を行った3つの箇所を挙げる。1つ目の箇所はA-Trait, A-State共に、現在はあまり使用しない言い回しであることから、選択肢2「いくぶんそうである」を「あまりそうでない」に変更した。2つ目については、A-Traitの教示文は「心の状態を表現する文章が下に記述してあります。その各文章について、ふだん、一般にどの程度の状態か、該当する番号を○で囲んでください。あまり考える必要はありませんが、現在の気持ちをもっともよく表現しているものに反応するよう心掛けてください」であるが、普段の様子を聞いているのか今の状態を聞いているのか紛らわしいため、「心の状態を表現する文章が下に記述してあります。その各文章について、自分が普段、一般にどの程度の状態か、該当する番号を○で囲んでください。あまり考える必要はありませんが、最もあてはまるものに反応するよう心掛けてください。」に変更した。最後に、A-Stateの教示文は「心の状態を表現する文章が下に記述してあります。その各文章について、現在、今どの程度感じているか、該当する番号を○で囲んでください。あまり考える必要はありませんが、現在の気持ち

を最もよく表現しているものに反応するよう心掛けてください」であるが、フィラーを使用している時の状態を想定してもらうため、「心の状態を表現する文章が下に記述してあります。その各文章について、上記のような言葉(「うーん」「なんか」「えーと」「あー」「あー」「うーんと」など)を使用する時を思い浮かべると、自分はどの程度の状態か、該当する番号を○で囲んでください。あまり考える必要はありませんが、最もあてはまるものに反応するよう心掛けてください」に変更した。

なお、清水・今榮(1981)ならって、A-TraitないしA-State尺度のいずれかで1あるいは2項目に無反応あった場合、その対象者の平均点に20を乗じ、その値を切り上げて整数にまとめれば尺度の総合得点を与えることができると考え、尺度間で2つ以内の無反応があっても無効回答とせず有効回答とした。

C. フィラーについての質問

予備調査に基づき、フィラーの使用頻度、使用のタイミング、使用意図に分けて質問を行った。フィラーを使用するタイミングと使用意図については予備調査に基づいて質問項目の作成を行った。

新たに設置した「フィラーの使用頻度」については、予備調査の「使用するフィラーの種類」において、年齢によって使用するフィラーが異なることから、大学生を対象に調査を行う本研究では結果に偏りが出ることが予想された。本研究ではフィラーを多用することが不安と関係するかどうかを検討するため、SD法を参考に10件法によるフィラーの使用頻度を聞く質問を考えた。質問は「会話の中で、自分が発言を行う前に『うーん』『なんか』『えーと』『あー』『あー』『うーんと』などの、会話の内容には直接関係のない言葉を発言することがあると思います。これらの言葉について考えた時、1が『全く使用しない』、10が『全てに使用する』である場合、あなたの使用頻度はどの程度になりますか。該当する番号を○で囲んでくださ

い」という文章を提示した。フィラーは全ての人が使用すると考えたが、全く使用しないことを考慮し、「全く使用しない」人からも回答が得られるようにした。また、フィラーの使用頻度を聞く質問で例示されているフィラーの種類は、予備調査で回答が多かったものを使用した。

フィラーを使用するタイミングと使用意図については複数回答を可能とし、現在の大学生がどのようなタイミングで、あるいは意図を持ってフィラーを使用するのかについて広くデータが得られるようにした。質問項目については予備調査でまとめた種類に準じた。

4. 手続き

大学の講義時間内において無記名かつ個別記述式の質問紙調査を配布した。口頭および書面(質問紙の表紙)で本調査への参加は任意であること、得られたデータは本研究のみで使用され、個人が特定されることはないことを伝えた。同意を得られた場合のみ回答を求めた。調査時間は15分程度であった。

第V章 結果

1. 有効回答数と分析対象者

大学生計332名を対象に質問紙調査を行った。そのうち、有効回答は254名であった(男性149名、女性105名、平均年齢19.3歳、SD 1.99歳)。

2. 尺度の記述統計量と信頼性

A. STAI日本語版

STAI日本語版についてはどちらの尺度も合計得点で分析した。A-Trait尺度の結果は、平均値47.8点、中央値48点、最頻値49点、SD 8.26点、最小値26点、最大値75点であり、クロンバックの α 係数は0.66であった。

A-State尺度については、平均値48.9点、中央値48点、最頻値48点、SD 8.84点、最小値23点、最大値77点であり、 α 係数は0.81となった。

また、A-TraitとA-Stateの分布については以

下のとおりである（図1）。

B. フィラーの使用頻度

全体の平均値は6.5であり，中央値と最頻値はともに7となった。フィラーを使用する頻度について1を選択した人は0名，2を選択した人は3名，3を選択した人は12名，4を選択し

た人は23名，5を選択した人は34名，6を選択した人は49名，7を選択した人は63名，8を選択した人は41名，9を選択した人は9名，10を選択した人は20名という結果となった。フィラーの使用頻度の分布を表したグラフは以下に示す（図2）。

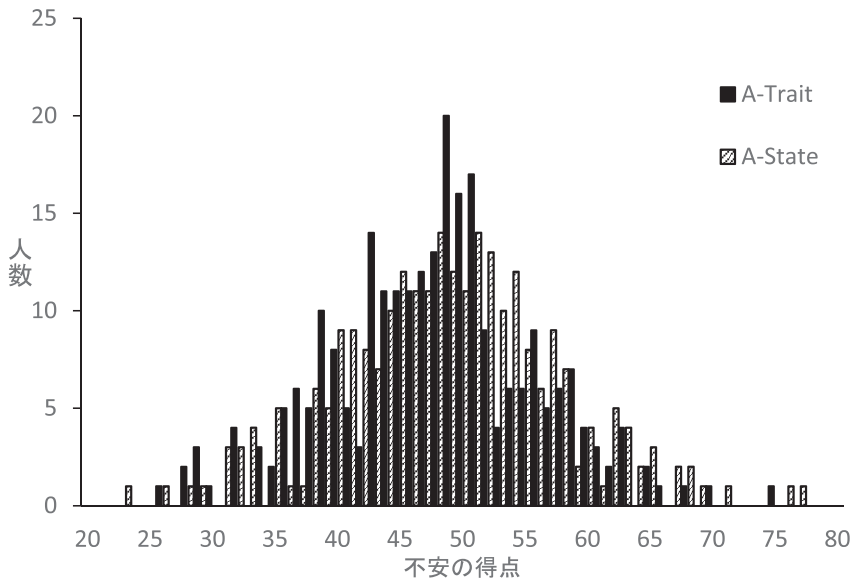


図1 STAI日本版における不安の得点

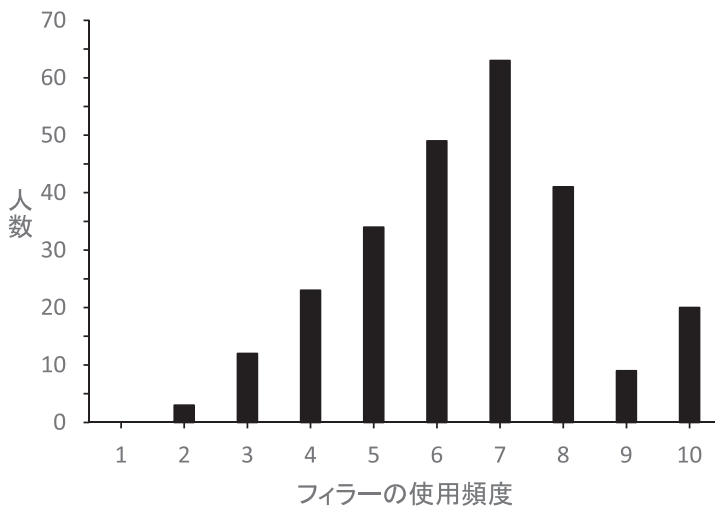


図2 フィラーの使用頻度

C. フィラーを使用するタイミング

フィラーを使用するタイミングについては、「返答に困った時」を選択した人が最も多い176名であった。次に多い順に「発言内容や言葉を考えてたり、思い出している時」(161名)、「緊張する時」(125名)、「話の内容を理解しようとしている時」(112名)、「発言に自信がない時」(110名)、「相手に話しかける前」(102名)、「相手に気を遣っている時」(88名)、「恥ずかしい時、恥ずかしい内容の時」(74名)、「癖・日常的に使用する」(70名)、「相手が発話している最中に言いたい事がある時」(63名)、「沈黙した時」(60名)、「相手が理解してくれるか不安な時」(58名)、「慎重になっている時」(54名)となり、最も該当者が少なかった項目である「目上の人と会話する時」を選択した人は46名であった。

D. フィラーを使用する意図

フィラーを使用する意図についても、タイミングと同様に該当者数が多い順から列挙すると、「考えるため」(191名)、「間を埋める、間をつなぐため」(147名)、「無意識に行っている」(118名)、「相づち」(115名)、「考えていることを相手に示すため」(77名)、「自分のペースを保つため」(58名)、「雰囲気をやわらかくするため」(49名)、「理解してもらいたい」(48名)、「下手(したて)に出る」(38名)、「自分が話を納得するため」(37名)、「感情表現」(35名)、「発話権の保持のため」(31名)、「自分に注意を向けてもらうため」(19名)、「説得するため」(18名)、「強調するため」(16名)となった。

3. フィラーの使用頻度とA-TraitおよびA-Stateの関係

A. フィラーを多用する群におけるA-TraitとA-Stateの平均値の差の検定

今回の調査において、フィラーの使用頻度の平均値は6.5であり、中央値と最頻値はともに7であった。人数の偏りも考慮した上で、使用

頻度が7以上の134人をフィラーを多用する群とした。このフィラーを多用する群のA-TraitとA-Stateの平均値に対応のあるt検定を行ったところ、有意差は認められなかった [$t(132) = -0.57, n.s.$]。

B. フィラーをあまり使用しない群におけるA-TraitとA-Stateの平均値の差の検定

同様に、使用頻度が6以下の122人をフィラーをあまり使用しない群として、この群におけるA-TraitとA-Stateの平均値の差を見るために対応のあるt検定を行ったところ、有意差は見られなかった [$t(120) = -1.94, n.s.$]。

C. A-TraitおよびA-Stateにおける、フィラーをあまり使用しない群とフィラーを多用する群の平均値の差の検定

フィラーを多用する群とフィラーをあまり使用しない群で、STAIの2つの下位尺度を用いてt検定を行った。A-Traitについては、フィラーを多用する群の平均値が有意に大きかったが [$t(252) = -2.27, p < .05$]、A-Stateでは有意差は見られなかった [$t(252) = -1.06, n.s.$]。

4. フィラーを使用するタイミングについて

フィラーを使用するタイミングにおける項目がどのように類似しているかを見るためにWard法を用いてクラスター分析を行ったところ、以下のような結果となった(図3)。クラスターを距離6で切断すると、全部で4つのクラスターが得られ、第1クラスターは目上の人と会話したり恥ずかしい時など「居心地の悪い時」、第2クラスターは主に話しかける前に使うということで「神経質になる時」、第3クラスターは話の内容を理解したり思い出そうしたりするなど「会話に集中する時」、第4クラスターは発言に自信がなかったり困ったりするなど「顔色を伺う時」と解釈した。

5. フィラーを使用する意図について

フィラーを使用する意図についてもWard法

でクラスター分析を行ったところ、以下のよう
な結果となった（図4）。タイミングの分析よ
りもクラスター間の距離が短かったため、2つ

のクラスターを抽出したところ、第1クラス
ターは自分に注意を向けたり、強調したりする
「会話を主導」するため、第2クラスターは間

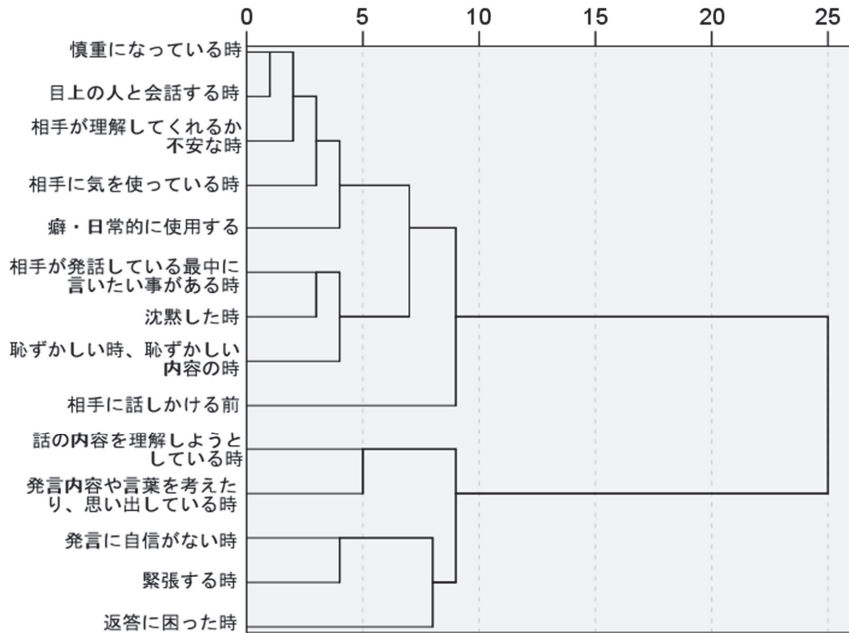


図3 フィラーを使用するタイミングのクラスター分析

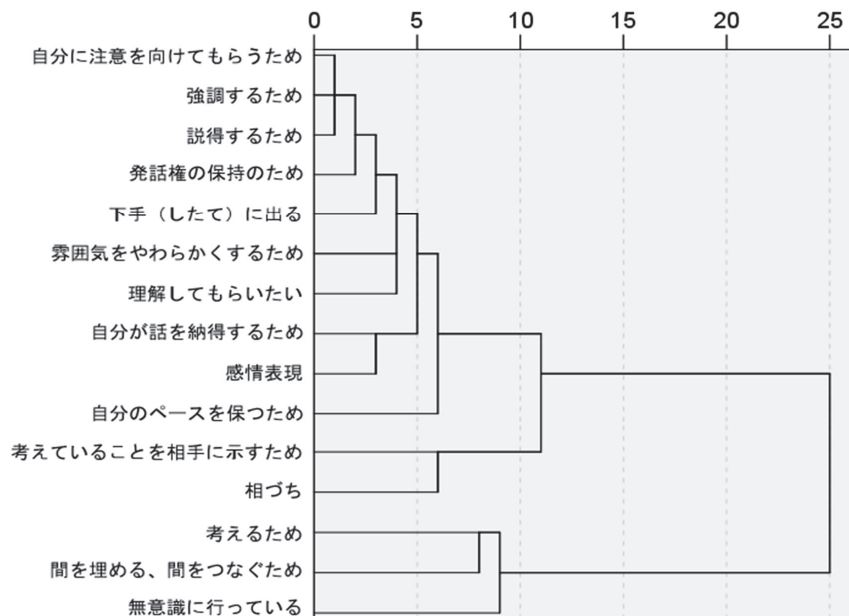


図4 フィラーを使用する意図におけるクラスター分析

を埋めたり、無意識に行ったりする「相互的な会話」のためであると解釈した。

6. 性差について

A. 性別の記述統計量

フィルターの使用頻度は男性が6.3 (SD = 1.91), 女性が6.7 (SD = 1.70) となった。男性において、最小値は2 (3名), 最高値は10 (10名) で、最頻値は7 (34名) であった。一方女性は、最小値が3 (2名), 最高値が10 (10名) であり、最頻値が7 (29名) であった。女性と男性のフィルターの使用頻度における分布を図5に示した。

また、A-Traitの平均は男性が47.2点 (SD = 9.05), 女性48.7点 (SD = 6.91) であった。最小値は男性が26点, 女性が32点で、最大値は男性が75点, 女性が68点であった。A-Stateの平均は男性が49.0点 (SD = 8.98), 女性が48.6点 (SD = 8.68) であり、最小値は男性が26点, 女性が23点, 最大値は男性が77点, 女性が71点となった。

B. 男女それぞれの結果に対する平均値の差の検定

(1) A-TraitとA-Stateの平均値の差の検定

男性はA-TraitよりもA-Stateの平均値が有意に大きかった [t(148) = -2.35, p<.05] が、一方、女性ではA-TraitとA-Stateにおける差は見られなかった [t(104) = 0.16, n.s.]。

(2) フィラーをあまり使わない群と多用する群のA-Traitの平均値の差の検定

上述の例にならって、男性と女性それぞれでフィルターをあまり使用しない群とフィルターを多用する群に分けてt検定を行った。男性ではフィルターを多用する群の平均値が有意に大きかった [t(147) = -2.59, p<.05] のに対して、女性においては有意差は見られなかった [t(103) = -0.13, n.s.]。

(3) フィラーをあまり使わない群と多用する群のA-Stateの平均値の差の検定

A-Traitと同様に、A-Stateにおいても男性と女性それぞれでフィルターをあまり使用しない群とフィルターを多用する群に分けてt検定を行った。男性ではフィルターを多用する群の平均値が有意に大きかったが [t(147) = -1.99, p<.05], 女性では有意差は見られなかった [t(103) = 0.42, n.s.]。

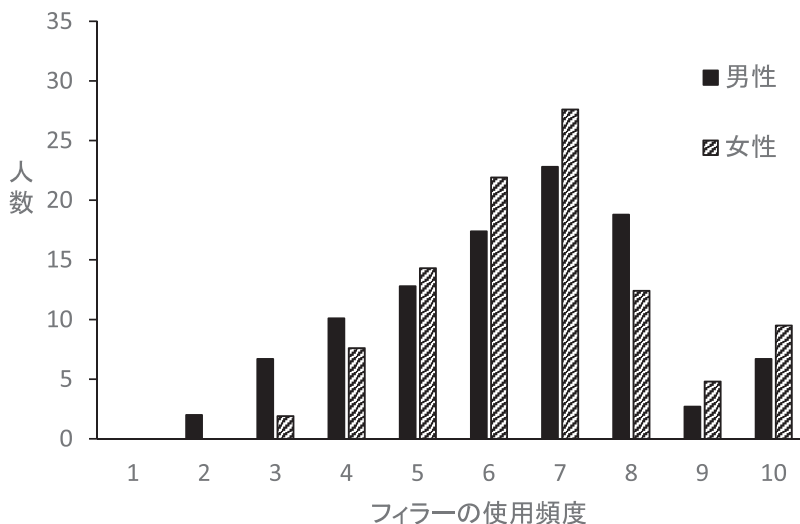


図5 フィラーの使用頻度の男女比較

C. 男女間での差

質問紙の尺度ごとに男女の差についてt検定を行ってみたが、A-Traitの平均値 [t(252) = -1.57, n.s.] においても、A-Stateの平均値 [t(252) = 0.36, n.s.] においても、性差は見られなかった。また、フィラーの使用頻度においても同様に、性差は見られなかった [t(252) = -1.52, n.s.]。

第Ⅵ章 考 察

1. フィラーの使用頻度について

本研究の質問紙では、フィラーの頻度について、1が「フィラーを全く使用しない」、10が「全てにフィラーを使用する」とした時、1から10のどこに該当するかを評定してもらった。本研究では1を選択した人はおらず、頻度の多少はあっても全く使用しないということはないことが示唆された。これに対して、10の「全てに使用する」という回答については、会話ごとに毎回使うのか、センテンスごとに使うのが曖昧であった。そのため、回答者に依存した質問となってしまう点は否めない。しかしながら、フィラーの使用頻度はほぼ正規分布であることが分かった。フィラーを使う頻度が多いと意識している人がそうでない人よりも多いといえる。今回の調査結果の特徴は、中央値と最頻値がともに7であったこと、10を選択した人は20名いたのに対して9を選択した人はその半分以下の9名であったことである。

中央値、最頻値がともに7であったことについて、どのように考えられるだろうか。大学の講義における文系と理系のフィラーの使い方の違いについて研究を行った野村(1996)によると、文系は理系の倍以上のフィラーを使用し、文系は「話し手自身の話しやすさのための機能を果たすフィラー」が多く、理系では「聞き手にとって意味のある」フィラーが多いという。今回の調査はほとんどの対象者が文系の大学生である。野村(1996)の研究はあくまでも「どのようなフィラーの使い方によって講義が進め

られているか」に焦点を当てたものである。本研究にそのまま当てはめて考えることは難しいとはいえ、今回の調査でフィラーの使用頻度が全体的に多かったのは、調査対象者の多くが文系の学生だったためである可能性も考えられる。

実際にどの程度使用しているかは別として、本研究において本人の自覚ではフィラーをやや多く使用すると感じている人が多いことが認められた。本研究では「フィラーをどのくらい使用していると自覚しているか」という側面しか明らかにできなかったが、今後の研究では、フィラーを使用することについて考えた時に、どのような印象を受けるのか、実際に使用する頻度と自覚している頻度とはどのような差があるのかなどについても調べる価値があると考えられる。

2. フィラーを使用するタイミングについて

フィラーを使用するタイミングで過半数の回答が得られた「返答に困った時」や「発言の内容や言葉を考えたり、思い出している時」は、言語学におけるフィラー研究で既に概念化されている要素である。

フィラーを使用するタイミングにおいて、クラスター分析では「居心地の悪い時」「因子神経質になる時」「会話に集中する時」「顔を伺う時」の4つのクラスターが得られた。本研究ではフィラーを使用するタイミングにおいて、言語学的なフィラーの研究とは違ったフィラー使用に至る背景的要素を垣間見ることができた。「会話に集中する時」以外のクラスターは「リラックスした会話が困難な場合」に出現すると考えられる。フィラーを使用するタイミングには会話を発展させるための言語指標的要素と不安や緊張などの情緒的表出的な要素があるといえよう。

3. フィラーを使用する意図について

フィラーを使用する意図において過半数を超える回答が得られたものは「考えるため」「間を埋める、間をつなぐため」であり、フィラーを使用するタイミングで過半数を超える回答を

得られた項目と同様に、フィルターの言語的研究で既に概念化されている項目であった。

フィルターを使用する意図におけるクラスター分析では、「自分に注意を向けてもらうため」「強調するため」「説得するため」が最も近接しており、自分の話を聞いてもらいたい気持ちやわかってほしい気持ちからフィルターを使用する「会話を主導」するためのクラスターがまず第一に考えられる。一方で先行研究に多く出現した「考えていることを相手に示すため」という意図は同じクラスター内にまとめられるものの距離は比較的遠くなった。

フィルターを使用する意図における2つ目のクラスターである「相互的な会話」の存在から、フィルターには演説的な話をする際に使用されるものと、対話的な会話をする際に使用されるものの、2種類に分類できることが示唆された。これはフィルターの先行研究でも述べた、Maynardが指摘した「言語表出に関わるフィルターと、対人関係のために用いられるフィルターの2種類」(福原, 2009)というフィルターの分類に似ている。

今回の調査からは、フィルターは考えていることを伝えるためのものと言うよりも自分の話したいことを話すため、つまり会話の主導権を得る要素の方が強いと考えられる。

4. STAI日本語版について

今回の調査においてA-TraitもA-Stateもほぼ正規分布となった。中央値は両尺度とも48点であり、不安の高さは、ごくわずかであるが少ない傾向にあると言える。それぞれの分布の特徴として、A-Traitは得点が43～50点の人数が非常に多く、A-Stateはまんべんなく分布していた。両尺度において男女での差は少なかった。清水・今栄(1981)がSTAI日本語版を作成した当時は、学年末試験の直前と平常授業直後で調査を行っており、特性不安を表すA-Traitの結果は平常時と試験直前でそれぞれ45.36点と45.35点であった。水口ら(1991)は、疫学的な高不安者の判定基準として「男性では

状態不安は42点以上、特性不安は44点以上、女性では状態不安は42点以上、特性不安は45点以上が高不安と判断する」と述べている。正常成人の平均得点が「特性不安は 38.8 ± 9.68 」, 「状態不安は 36.6 ± 8.98 」(水口ら, 1991)であることを考えても、今回の結果は、A-Traitが47.8点、A-Stateが48.9点と、先行研究の結果よりも不安が高い結果となった。このことについてはいくつか要因が考えられる。1つ目は清水・今栄(1981)の研究から40年弱を経てストレス社会と呼ばれるようになるほどストレスが身近なものになった。そのために不安が生じやすくなった可能性が挙げられる。2つ目は、フィルターについての質問を行うと説明した直後にA-Traitを回答したため、影響が生じた可能性も考えられる。

5. 仮説の検証

フィルターを多用する群におけるA-TraitとA-Stateのt検定には差が見られなかったため、「仮説1: フィルターには不安を一時的に下げる効果があり、フィルターを多用する人の方がフィルターを使用すると一時的に不安が下がる」は立証されなかった。またフィルターをあまり使用しない群におけるA-TraitとA-Stateの平均値に差が見られなかったため、「仮説2: フィルターには一時的に不安を下げる効果があり、フィルターをあまり使用しない人の方が一回の使用価値が高まるため、フィルターを使用している時には一時的に不安が下がりやすい」は立証されなかった。

一方、「仮説3: フィルターには不安を下げる効果があり、フィルターを使えば使うほど特性的な不安も一時的な不安も下がっていく」に基づいて検証を行ったところ、A-Stateにおいてはフィルターを多用する群とあまり使用しない群で差が見られなかったが、A-Traitでは有意差が見られた。フィルターを使用することによって不安が下がるとは決して言えないが、フィルターを使用することと不安の高さには何らかの関係があると考えられる。先行研究において、Ragsdale(1976)は、「すべてではないが、い

くつかの言いよどみ現象は不安と明確に関係することを立証している研究は、現在かなり多く見られる」が、しかしながら、「『えーと』現象 (the Ah Ratio) が不安と無関係であることはかなり広範に同意されている」(ここでの「『えーと』現象」とは、フィラーを示す)と述べている。とはいえ、フィラーの使用頻度を切り口に不安との関係性を考えると、特性的な不安において関係がある。「フィラーを使用することで不安が軽減される」とまでは述べられないが、「不安が高いからフィラーを使用する」とは言うことができる。

6. 性差について

本研究において男女間のフィラー使用頻度の平均値に差があるとはいえなかったが、データの分布には差が見られた。男性よりも女性の方がフィラーをよく使用すると考えている人が多いのに対し、男性の方がフィラーの使用頻度の範囲(最大値と最小値の差)が大きかった。また不安尺度であるSTAIにおいても、女性よりも男性の方が不安得点の範囲(最大値と最小値の差)が大きくなった。

平均の差は男性にのみ見られ、特性的な不安を示す値よりもフィラーを使用する状態の不安の方が高くなり、また、どちらの不安においてもフィラーを多用する人の方が不安が高まるという結果になった。このことから、本研究の大きな仮説である「フィラーの使用頻度によって不安の程度が高まる」ことへの可能性が見出された。一方で、女性ではまったくこのような結果は見られなかった。女性において差が見られなかったことについては2つの可能性が考えられる。1つは、女性は不安の媒体としてフィラーを使用せず、他の情動が背景にあるということである。2つ目は、女性はフィラーの使用頻度やA-Trait, A-Stateいずれにおいても男性よりも分散が小さかったことから考えて、本研究では特に女性に中心化傾向が起こってしまったという可能性である。

フィラーを使用するタイミングについて、男

女間の差が大きかった9項目のうち、女性の方が該当者の割合が多かったのは「発言内容や言葉を考えたり、思い出している時」「相手が発話している最中に言いたいことがある時」「話の内容を理解しようとしている時」「癖・日常的に使用する」「相手に気を遣っている時」「発言に自信がない時」「恥ずかしい時、恥ずかしい内容の時」の7項目であった。最も差があった項目は「発言内容や言葉を考えたり、思い出している時」において女性が男性よりも非常に高かった。この項目では、当てはまると答えた男性は5割強ほどであったのに対し、女性は7割以上が当てはまると答えた。これは、松原(1996)による「適当な表現が見つかるまで、或いは発語内容をまとめたりする時間を稼ぐ機能」や、山根(2002)のフィラーの果たす役割5点における「③適切な応答を考えつくまでの時間稼ぎ」に当てはまり、女性は男性よりもより言語学的な解釈に近いフィラーの使い方をすることが考えられる。男性よりも女性の方が当てはまると答えた割合が多かった項目は他にもいくつかあり、「相手が発話している最中に言いたい事がある時」「話の内容を理解しようとしている時」「癖・日常的に使用する」「相手に気を遣っている時」「発言に自信がない時」「恥ずかしい時、恥ずかしい内容の時」が挙げられる。このことから男性よりも女性の方がフィラーの使い方が多義であることが予想される。また、「癖・日常的に使用する」以外は発言内容に関する項目であり、女性は会話の内容や自分の発言を男性よりも気にしている傾向にあると言える。さらに、女性は発言内容が気になっている時にフィラーが現れやすいと考えられる。

一方で男性の方が該当者の割合が多かった項目は、「沈黙した時」「慎重になっている時」であった。男性はこのような場面でフィラーが女性よりも多く使用される可能性が考えられる。「沈黙した時」や「慎重になっている時」は緊張する場面が想起されるが、「緊張する時」には男女での差は少なく、5割の人が緊張した時

にはフィラーを使用すると答えている。男性においては「沈黙した時」「慎重になっている時」の倍の該当者であった。「緊張する時」では男女ともにフィラーを使用することはわかったが、「沈黙した時」「慎重になっている時」は男女での感じ方が異なると考えられ、沈黙する場面や慎重になるような場面にフィラーを使用するということから、男性は場の雰囲気を感じてフィラーを用いていると考える。

フィラーの使用意図では該当率の差が少なく、ほぼ同じ割合の項目が多かった。その中でも差が大きかったものは「発話権の保持のため」「間を埋める、間をつなぐため」「無意識に行っている」「強調するため」であり、男性の方が該当者の割合が多かった項目は「発話権の保持のため」「強調するため」であった。これらの項目は該当者数がそもそも少ない項目ではあるが、男性は女性よりも自分の主張のためにフィラーを使用すると考えられる。一方で女性の方が多かった項目は「間を埋める、間をつなぐため」「無意識に行っている」であった。気づかないうちにフィラーを使用しているという、会話におけるフィラーのあり方がそのまま本調査の結果として表れているとも考えられる。

フィラーを使用する意図については、男女間での該当者はほとんどが同じ程度であった。その中でも該当者の割合の差が大きかったものは「発話権の保持のため」「間を埋める、間をつなぐため」「無意識に行っている」「強調するため」であった。「発話権の保持のため」と「強調するため」は男女ともに該当者自体の割合は少なかったが、どちらも男性の方が女性よりも多かった。このことから、男性は女性よりも自身の存在をアピールするような目的でフィラーを使用することが示唆される。一方で女性の方が該当者の割合が多かった項目は「間を埋める、間をつなぐため」と「無意識に行っている」であった。これらは男女ともに該当者が比較的多い項目で、女性に関してはどちらも半数を超えた回答を得られた。女性の方が「間を埋める、間をつなぐため」にフィラーを使用しているこ

とから、どのような感情が込められているにせよ、女性は男性よりも沈黙を好まないことが考えられる。また、「無意識に行っている」のが女性は過半数を超え、男性も4割強であったことからフィラーについて意識的に考えることの難しさを物語っている。また、フィラーを使用する意図における女性の該当者数が多かったものは、「考えるため」に次いで「間を埋める、間をつなぐため」「無意識に行っている」が多い。女性は男性よりもフィラーを使用することに対して無意識であり、フィラーの語源である“間を埋めるもの”そのものとして使用していることが示唆される。

7. 総合考察

先行研究 (Ragsdale, 1976) ではフィラーと不安は無関係であると述べているが、今回の調査においてはフィラーを使用する頻度が高いほど特性的な不安が高いということ、男性においてフィラーを使用する頻度が高い人ほど特性的な不安もフィラーを使用する時の不安も高いという結果から、フィラーと不安が一概に無関係であるとは言い難い。先行研究と今回の調査結果が異なった原因として、調査の方法が異なるということも考えられるが、不安とフィラー、あるいはフィラーを含んだ大きな概念としての言いよどみとの関連を見る研究は数十年前のものが多く、フィラーの使われ方や意味が以前とは変化している可能性もあげられる。近年では、インターネットがあることが当たり前になり、国際化が以前よりも著しく進み情報化社会化された。その影響で新しい言語が急速に生み出されているように感じられる。福原 (2009) によって「なんか」が若者言葉であると述べられていたが、福原の研究から10年ほどたった現在では、日常的に耳にする言葉として違和感がない。次々と新しい言葉が生み出される中で、「フィラーが不安と関係がある」ことについて先行研究と異なっている、ストレス社会化など、他の要素も考えられる。これらのことから、フィラーと不安との関係については今一

度考え直してみる価値が十分にあると考える。

しかしながら、本研究には課題が多く見受けられる。質問紙にて調査を行ったため、調査協力者がどのようなフィラーの使用場面を思い浮かべて回答したかどうか、どのような不安を想起したのかも異なる。フィラーの使用意図において「無意識に行っている」に該当した人数は118名と過半数には到達しなかったものの、多くの人がフィラーは普段意識して使用していないことが分かる。そのため、意識している部分のみが扱われる質問紙調査はあまり向いていなかった可能性は大いにある。今回の研究では“意識して考える限り”フィラーは不安と関係がありそうであると言える。

また、本研究最大の課題は、フィラーを使用した後にはどういった状態になるかを調査協力者に質問を行っていないという点であると考えられる。フィラーが不安と関係すると分かっても、フィラーを使用した後の状態を質問しなければフィラーがどのような効果を発揮するのか分からない。今回は検定結果の有意差が見られなかったために仮説の立証はなされなかったが、

フィラーを使用した後にどうなるのかを把握していない限り、たとえ全ての結果で有意差が見られても一概にフィラーの使用効果を述べることは困難である。

このように検討の余地がある今回の研究であるが、フィラーを使用する頻度が高いほど特性的な不安が高いということや、男性においてフィラーの使用頻度とそれぞれの不安との関係が見られたことは、フィラー研究における大きな成果であると考えられる。カウンセリングや心理療法などの臨床場面において、患者やクライアントがフィラーを多く使用する場合は、特性的な不安が高い可能性があると考えられる。今回の結果からはあくまで可能性としてのみの言及であるが、臨床場面において他の手がかりが見出せない場合には、一つの見方として参考にすることもできるだろう。その人がどのような人なのかを知るための一つの見方として確立するためにはフィラーと不安の関係について今後も検討していく必要があり、また検討を行う価値があると考えられる。

引用文献

- Freud, S. (1917). *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. 井村恒郎・馬場謙一 (訳) (1994). 精神分析入門 (上). 日本文教社.
- 福原裕一 (2009). 会話に見られる「なんか」の機能拡張: フェイス・ワークの観点から. 国際文化研究 (東北大学), 15, 181-195.
- 石川 創 (2010). あいづちとの比較によるフィラーの機能分析. 早稲田日本語研究 (早稲田大学日本語学会), 19, 61-72.
- Jung, C. G. (1905). *Über das Verhalten der Reaktionzeit beim Assoziationsexperimente*. *Journal für Psychologie und Neurologie*, IV, 1-36. 高尾浩幸 (訳) (1993). 診断学的理想研究. 人文書院.
- 海保博之・原田悦子 (1993). プロトコル分析入門: 発話データから何を読むか. 光明社.
- 河合隼雄 (1967). ユング心理学入門. 培風館.
- 小出慶一 (2006). フィラー「このー」「そのー」「あのー」について: その由来, 機能, 相互関係. 埼玉大学紀要, 42 (2), 15-27.
- 小出慶一 (2009). 現代日本語の意味・用法の広がりに関する記述的研究: 多機能化, フィラー, フィラー化. 埼玉大学紀要, 6, 1-37.
- 小出慶一 (2017). 「もう」はどのようにフィラーになったか: フィラー化の経路とフィラーの機能. さいたま言語研究 (埼玉大学), 1, 1-11.
- 小西友七・南出康世 (2001). ジーニアス英和大辞典. 大修館書店.
- 松浦和美 (1996). 日本語の談話における filler に関する研究. 教育学研究紀要 (中国四国教育学会), 42 (2), 522-527.
- 水口公信・下仲順子・中里克治 (1991). 日本版 STAI: 状態・特性不安検査 (使用手引). 三京房.
- 中村香代子 (2007). 日本語の感謝表現と共に用いられるフィラーについて: 自由記述式談話完成テストの回答分析から. 言語学教育研究論叢 (大東文化大学), 24, 149-168.
- 成田善弘 (2004). 第6部 精神分析. 氏原 寛・亀

- 口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (2004). 心理臨床大事典 改訂版. 培風館.
- 野村美穂子 (1996). 大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語:「フィラー」に注目して. 教育研究所紀要 (文教大学), 5, 91-99.
- Ragsdale, J. D. (1976). Relationships between hesitation phenomena anxiety, and self-control in a normal communication situation. *Language & Speech*, 19(3), 257-265.
- 定延利之 (2010). 会話においてフィラーを発するという事. 音声研究, 14 (3), 27-39.
- 定延利之・田窪行則 (1995). 談話における心的操作モニター機構:心的操作標識「ええと」と「あの(ー)」。言語研究, 108, 74-93.
- 清水秀美・今栄国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版(大学生用)の作成. 教育心理学研究, 29 (4), 62-67.
- 曾我祥子 (1983). 日本版STAIC標準化の研究. 心理学研究, 54 (4), 215-221.
- 高木智世・森田 笑 (2015). 「ええと」によって開始される応答. 社会言語科学, 18 (1), 93-110.
- 田窪行則 (1995). 音声言語の言語学的モデルをめぐって: 音声対話管理標識を中心に. 情報処理, 36 (11), 1020-1026
- 田窪行則・金水 敏 (1997). 応答詞・感動詞の談話的機能. 音声文法研究会 (編) (1997). 文法と音声. くろしお出版.
- 田中 敏 (1981). 日本語発話における言いよどみ現象の分類と特徴づけ. 心理学研究, 52 (4), 213-218.
- 富坂容子 (2002). 断定回避のディスコースマーカ. 言語と文化 (甲南大学), 6 (1), 103-115.
- 内田らら (2001). 会話に見られる「なんか」と文法化:「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか? 東京工芸大学紀要, 24 (2), 1-9.
- 上田有希子 (2005). 話しことばの位相: 会話におけるフィラーの研究. 日本文学 (東京女子大学), 101, 163-183.
- 山根智恵 (2002). 日本語の談話におけるフィラー. くろしお出版.

Abstract

On the Relationship Between Using Fillers and the Strength of Anxiety

Ena Okada

The present study was intended to investigate the relationship between using “fillers,” the interjectional words such as “eh” and “mah” in Japanese, and the strength of anxiety. Considering the lack of empirical data in previous studies, it deserved to collect data of using fillers. After preliminary survey with graduate students, a survey with new questionnaire was conducted with 254 undergraduate students. The questionnaire consisted of a Japanese version of 40-item State-Trait Anxiety Inventory (STAI) and three questions on the frequency, timing, and intention of using fillers. Although no overall difference between the frequent and the less frequent users of fillers in terms of STAI scores was obtained, there was a significant difference of STAI scores between the frequent and the less frequent users in male students, which suggested the relationship between using fillers and the strength of anxiety.

東京国際大学大学院臨床心理センター活動報告（2018年度）

臨床心理学研究科・臨床心理センター長 小田切紀子

<沿革・施設>

東京国際大学大学院臨床心理学研究科付属の臨床心理センターは2000年5月、高田馬場駅前のビル3階にオープンした（新宿区高田馬場1-28-10）。翌年の2001年4月、臨床心理学研究科が西早稲田（新宿区西早稲田2-6-1 東京国際大学早稲田キャンパス）に開設されたことに伴い、同じ早稲田キャンパスの3階に移転し活動していた。その後、2011年9月末に機能の一部を、人間社会学部と同じ第2キャンパス（埼玉県川越市の場2509 東京国際大学第2キャンパス22号館）に移し、それに伴い臨床心理センターも移転した。

川越キャンパスの臨床センターは、早稲田キャンパスの臨床センターの基本方針と臨床的設定を継承し、受付、待合室、インテーク室（1室）、面接室（4室）、プレイルーム（3室）で構成されている。面接室はそれぞれの部屋によってやや異なった雰囲気になっており、箱庭療法や心理検査、心理療法に対応できるようになっている。インテーク室や面接室はすべて適切な広さの部屋で、ソファセットや心理検査用の机と椅子などが設置されている。箱庭療法を行うことのできる面接室には箱庭と充実したフィギュアが揃えられている。プレイルームも、子どもが独創的な遊びを展開しやすいように工夫されている。

<運営体制>

臨床心理学研究科の6名の専任教員（小田切紀子：センター長、大矢泰士、田中信市、中村留貴子、溝口純二、妙木浩之）が、センターの運営方針や院生に対する教育方針などを共有し、協議しながら、運営と指導を行っている。センターには、3名の臨床経験豊かな臨床心理士がインテーカーとして勤務し、受付スタッフ2名が交代で勤務し、来談者の窓口、院生への対応をしながら、さまざまな事務的処理も担当し、センターの円滑な運営に大きく貢献している。

センターの運営については、スーパーヴィジョン体制の充実を重視している。院生がセンターで事例を担当するときには、上記の専任教員が必ず定期的なスーパーヴィジョンを行い、修了生が事例を担当する場合においても、スーパーヴィジョンを義務付けている。スーパーヴィジョンは心理療法と心理検査について実施しており、心理検査のバッテリーの組み方や解釈の実際、報告書の書き方にいたるまで、個別に指導している。

また、月に1回、月曜日6限にケースカンファレンス（事例検討会）を開催している。このカンファレンスには、臨床心理学研究科の教員と在学中の院生、および修了生たちも多く参加しており、修了後研修の場として活用されている。そこでの相互ディスカッションや教員によるコメントも貴重な研修の機会になっている。

<2018年度相談件数・相談内容>

2018年度の全相談件数は、111件（表1）であり、2017年度より14件多い。依頼相談内容別に見ると上位3つは、不登校26件、親子関係24件、性格・対人関係21件であり、この傾向は近年同じである。のべ相談回数（表2）では、成人（18-49歳）が406回と最も多く、幼児・児童（-12歳）169回、壮年（50歳以上）137回、青少年（13-17歳）119回となり、幅広い年齢層が来談している。本センターでは、親子並行面接を提供しており、子どもの不登校や発達障害などの問題を抱えて来談する家族

に対しては、親には親面接、子どもにはプレイセラピー（遊戯療法）などを行っているため児童や青少年の相談件数が多くなっている。

新規相談件数（表3）は、71件であり、昨年度より11件増えた。新規来談者の経路（表4）を見ると、地域の医療機関、相談機関、行政機関から紹介された依頼が、38件あり、過去最高の紹介件数であり、本センターが地域の医療機関などから信頼されていることがよく理解できる。パンフレットとインターネット（大学HP）も16件であり、パンフレットの作成と郵送、本センターのHPの充実が重要であることがわかる。

以上のように、来談者の年齢層や相談内容は多岐に渡り、深刻な内容の心理相談に応じたり、相談期間も年度を超えて長期にわたることもあるが、臨床心理士を目指す院生たちにとっては貴重な心理臨床を修得する場となっている。

表1 2018年度全相談件数
（相談内容別内訳）

（人）

相談内容	件数
性格・対人関係	21
ひきこもり	2
抑うつ	3
情緒不安定	5
親子関係	24
家庭内暴力	2
育児教育	11
不登校	26
職場不適応	1
広汎性発達障害	2
学校生活	1
不眠	1
子の場面緘黙	1
パニック障害	1
抜毛症	1
就労	1
兄との関係	1
なし	2
学校が嫌	1
自閉症	1
心理検査のみ	3
合計	111

表2 延べ相談回数

	相談件数	延べ 面接回数	主な相談内容
幼児、児童（～12）	16	169	親子関係、不登校、性格・対人関係、家庭内暴力
青少年（13～17）	16	119	不登校、性格・対人関係、学校生活、不眠
成人（18～49）	61	406	性格・対人関係、親子関係、不登校、情緒不安定、育児教育、 広汎性発達障害、抑うつ、家庭内暴力、ひきこもり、職場不適応、 抜毛症
壮年期以上（50～）	15	137	親子関係、性格・対人関係、不登校、情緒不安定、育児教育、 就労
心理検査のみ	3	0	
合計	111	831	

表3 2018年度新規相談件数

（相談内容別内訳）

（人）

相談内容	件数
性格・対人関係	12
ひきこもり	2
抑うつ	1
情緒不安定	4
親子関係	14
育児教育	8
不登校	20
職場不適応	1
パニック障害	1
抜毛症	1
広汎性発達障害	1
なし	2
就労	1
心理検査のみ	3
合計	71

表4 2018年度新規来談者経路

（人）

来室経路	来談者
パンフ・インターネット	16
知人から	14
教育機関	19
医療機関	18
行政機関	1
学内関係者	1
クライアントの関係者から	1
不明	1
合計	71

修了生

黒木 剛
張本 達城
大竹 咲紀
菅原 郁香
永野 美那子
日高 元史
志満 南海
日下 寛映

齋藤 美 菜
植松 由 香
遠藤 早 美
北 紀 彦
今村 知 晃
原 拓 也
木 下 雅 貴

博士課程後期

池田 有加里

博士課程前期

宇田川 絵 巳
坪 友 美
遠藤 汐 梨
太田 百 香
太田 ももこ
岡田 恵 奈
岡野 仁 美
片柳 誠
小山 涼太郎
鈴木 楓

高野 まりな
玉内 美 憂
西 由利子
堀川 裕 貴
車田 文 子
根本 裕 幸
林田 眞 来
ビスタ ビネス
前川 知 香
横山 美 紅

センター長

小田切 紀 子

インターカー

中田 香 織 (臨床心理士)
桑原 葵 (臨床心理士)
花里 由紀子 (臨床心理士)

センター運営委員

溝口 純 二
大矢 泰 士
田中 信 市
中村 留貴子
妙木 浩 之

○東京国際大学大学院紀要編集及び刊行に関する規程

2016年9月30日制定

(目的)

第1条 この規程は、東京国際大学（以下、「本学」という）大学院における教育研究を助長し、学術的な教授研究の成果を学会及び広く社会に公表する手段として刊行する学術雑誌（以下、「大学院紀要」という）の編集・刊行に関する事項及びその他関連事項を定めることを目的とする。

(名称)

第2条 本学が編集・刊行する大学院紀要は、次の2編とする。

(1)『人文・社会科学研究—東京国際大学大学院』（英語名称：The Graduate School Bulletin of Social Sciences and Humanities, Tokyo International University）

(2)『臨床心理学研究—東京国際大学大学院臨床心理学研究科』（英語名称：The Graduate School Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo International University）

(編集・刊行組織)

第3条 大学院紀要の編集及び刊行は、本学FD委員会（以下、「委員会」という）の責任において行う。

2 委員会の下FD委員及び研究科長により構成される「大学院紀要編集会議」（以下、「編集会議」という）を置き、委員長の指示により編集及び刊行の実務を担当せしめる。

3 「大学院紀要編集会議」の責任者は、FD委員の中から委員長が推薦し学長が指名するものとし、本規程における委員長の職務を都度委嘱することができる。

(掲載する学術的な教授研究成果の種類)

第4条 大学院紀要に掲載する学術的な教授研究の成果は、学術論文、研究ノート及びその他学術研究の成果と委員長が編集会議の意見を徴し判断したもの（以下、「大学院紀要掲載論文等」という）とする。

(査読制度等)

第5条 大学院紀要掲載論文等のうち「学術論文」については、査読制度により掲載の可否を判定するものとする。

2 学術論文の査読は、委員長の囑託する査読審査委員が行う。

3 委員長は、査読審査委員の中の主査から提出された委員長宛て査読審査結果報告及び各査読審査委員の報告書に基づき、編集会議の意見を徴し掲載の可否を判定する。

(査読制度の非適用)

第6条 学術論文を除く大学院紀要掲載論文等については、前条の査読制度は適用しない。但し、編集会議は、大学院紀要掲載論文等の形式等につき、著者に修正を指示することができるものとし、当該指示に正当な理由なく著者が従わない場合、掲載を認めないことがある。

(寄稿資格)

第7条 大学院紀要への寄稿資格を有する者は、次の各号に定める者とする。

(1) 本学大学院研究科に所属する学生

(2) 本学大学院研究科修了後3年以内の者

(3) 前各号の他、編集会議の意見を徴し委員長が適当と認めたる者

(大学院紀要掲載論文等の形式等)

第8条 大学院紀要掲載論文等の形式、提出方法等に係る詳細は、別に定める「東京国際大学大学院紀要掲載論文等執筆・提出要領」（以下、「要領」という）による。

- 2 大学院紀要掲載論文等の形式等は、原則として APA (American Psychological Association) 方式とするが、当該論文等の分野において確立した標準の書式・形式等がある場合には、それに従うことも可とする。
- 3 大学院紀要掲載論文等の原稿は、著者の責任において作成された完成原稿とし、形式が整っていない原稿若しくは完成原稿とみなし得ない原稿は、受理しない。
- 4 大学院紀要掲載論文等の掲載原稿の校正等は、著者の最終責任においてこれを行う。

(使用言語)

第 9 条 大学院紀要掲載論文等の執筆に使用する言語は、日本語又は英語とする。

(発行の形態)

第 10 条 大学院紀要の発行の形態は PDF 等の電子媒体とし、本学ホームページ等において公表する。

- 2 刊行された大学院紀要は、「国立情報学研究所 (NII : National Institute of Informatics) が運営する学術論文や図書・雑誌等の学術情報データベース」CiNii での公開、国立国会図書館の NDL-OPAC への取載、海外における同様な方法での公表等により、適切に周知するものとする。

(発行者)

第 11 条 大学院紀要の発行者は、東京国際大学学長とする。

(発行時期等)

第 12 条 大学院紀要の刊行は、各編とも原則として毎年度 1 回とし、編集会議において発行予定期日、原稿締切日等を設定する。

(転 載)

第 13 条 大学院紀要に掲載された大学院紀要掲載論文等を執筆者が他所に転載する場合には、委員長の了解を得るとともに、初出が大学院紀要であることを明示しなければならない。

(改 廃)

第 14 条 この規程の改廃は、常務会の議を経て理事長が行う。

附 則：

1. この規程は、2016 年 9 月 30 日より施行する。
2. この規程の施行に伴い、以下に記載する「東京国際大学大学院研究科紀要刊行に関する規程」は廃止する。
 - (1) 「商学研究—東京国際大学大学院商学研究科」刊行に関する規程
 - (2) 「国際関係学研究—東京国際大学大学院国際関係学研究科」刊行に関する規程
 - (3) 「応用社会学研究—東京国際大学大学院社会学研究科」刊行に関する規程
 - (4) 「経済研究—東京国際大学大学院経済学研究科」刊行に関する規程
 - (5) 「臨床心理学研究—東京国際大学大学院臨床心理学研究科」刊行に関する規程

編 集 後 記

今年も臨床心理学研究科紀要を無事に発行することができました。

2018年度で中村留貴子先生，2019年度で溝口純二先生がご退官されることになり，臨床心理学研究科の専任教員数は，かつての半分近くになりましたが，連携して学生指導と臨床心理センターの運営に精力を注いでいます。臨床心理センターも，報告に記載しているように地域の相談機関としての役割を果たしております。教員を代表して皆様のご尽力に感謝申し上げます。

臨床心理学研究科長 小田切紀子

臨床心理学研究 東京国際大学臨床心理学研究科 第18号

2020（令和2）年3月31日発行

【非 売 品】

編 集 者 東 京 国 際 大 学 大 学 院
臨 床 心 理 学 研 究 科 紀 要 編 集 委 員

発 行 者 塩 澤 修 平

発 行 所 〒350-1197 埼玉県川越市市場北1-13-1
TEL (049) 232-1111
FAX (049) 232-4829

印 刷 者 株 式 会 社 東 京 プ レ ス
〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-18

THE STUDY OF
CLINICAL PSYCHOLOGY

Graduate School of Clinical Psychology
TOKYO INTERNATIONAL UNIVERSITY

No.18

Articles

- | | |
|--|---------------------------------|
| Early Therapeutic Alliance in Terms of Mentalization | Keigo Azuma |
| An Exploratory Study on Types of Projective Manner and Content in Sandplay | Yukari Ikeda
Shinichi Tanaka |
| On the Relationship Between Using Fillers and the Strength of Anxiety | Ena Okada |

Report

- | | |
|---|----------------|
| A Report on Activities of the Clinical Psychology Center of Tokyo International University 2018 | Noriko Odagiri |
|---|----------------|
-

2 0 2 0